

# ブルターニュのトロメニ

—伝説と現在—

La troménie de Bretagne : Légendes et réalité d'aujourd'hui

## 新谷尚紀

- ① はじめに —民俗学の海外調査研究—
- ② ブルターニュのトロメニ
- ③ ランドロウのトロメニ
- ④ グエヌウのトロメニ
- ⑤ ロクロナンのトロメニ
- ⑥ トロメニの構成と特徴
- ⑦ おわりに —伝承をめぐる力学—

### [論文要旨]

トロメニtroménieはブルターニュ地方の聖人信仰と結びついた伝統行事である。アイルランドやウエールズからやってきた聖人が、領主から一日に歩くことができた範囲の土地を与えようと言われて歩いた順路を、毎年あるいは6年に1回、聖遺骨reliquesを担いで行列を組み、十字架croixやバニエールbannièresとともに行進processionして一巡する。トロメニの語源は、ブルトン語のtro minihi、もしくはtro mene、つまり、minihi（修道院の囲い地）もしくはmene（山）のtro（一巡）と考えられ、tro（一巡）、tour（一周）がterritoire（領域）の設定に通じるところから、troménieとterritoireとの緊密性が浮かび上がる。そして、聖人の行跡の追体験としての儀礼的繰り返し、領域設定の再現を演出しており、儀礼による「原初回帰」の機能が発動し、歴史の硬い時間から民俗の柔らかい時間への移行が参加者の信仰衝動を刺激する。とくに、順路途中のスタシオンstationsの設営や人々の信仰儀礼的所作には、キリスト教カトリックの教義とは異なる聖樹・聖石・聖泉への伝統的なブルターニュの民俗信仰croyances populairesがその姿を現しており、両者の関係は決して習合や融合ではなく黙認許容と混在併存の関係にあるというべきである。また、参加者たちとその役割において特徴的なのは、プレジドン、ファブリシアン、アソシアシオン、ファミリー、その他のボランティア、など多様かつ自由意志による奉仕の参加が主流でありながら、逆にそれこそが柔軟で強靱な参加形式となっているという点である。そして、伝統行事に作用する、維持継続の推進力、創造変更への揚力、休止廃止への引力、という三つの作用力の相互関係の上に存在しつつ、参加者たち相互の無限の内と外という2種類の関係性が入れ子細工のように連なった集団実践であると同時に、個々の参加者の数だけ意味をもつ個人的実践でもあるという形式にこそ、伝統維持を支える基本力が潜在しているといえる。

## ①……………はじめに —民俗学の海外調査研究—

### ケガレ・ハラヘ・カミ理論と聖地ルルド

日本の民俗文化を主たる研究対象としている筆者が、最初にフランスの民俗文化に関心をもったのは、1987年のことである。それは聖女ベルナデッタの奇跡で有名なピレネー山麓の聖地ルルドのマサビエの洞窟に架けられたおびただしい数の松葉杖の写真を見たときであった。現在筆者が勤務している国立歴史民俗博物館の共同研究「儀礼と芸能における民俗的世界観」に、当時外部からの共同研究員として参加してとりまとめた論文<sup>(1)</sup>に深く関わるものであった。その掲載論文を中心として、まもなく『ケガレからカミへ』という論著<sup>(2)</sup>を刊行し、「すべてのカミはケガレから生れる」という当時としては過激な学説を発表していた筆者にとって、ルルドのマサビエの洞窟の前に病氣治癒の奇跡のしるしとして架けられていた松葉杖群は、日本でも香川県三野町の弥谷寺をはじめ各地の寺社に病氣治癒のしるしとして奉納されている松葉杖やコルセット、ギブスの類とまったく同じ意味をもつものと思われたのである。それは、日本の民俗の分析から得られた、「聖なる存在とは人々のケガレの吸引浄化装置である」という学説、つまり、ケガレ・ハラヘ・カミ理論の普遍性への期待を与えてくれるものであった。

1989年に実現した約一ヶ月間のフランス見聞旅行は、さらにブルターニュ地方の伝統行事、パルドン祭りへの関心を深めるものとなった。パルドンがすみませんの意味ならば、人々の一年間の罪ケガレを悔い改め、祓え清める祭りであるはずである。それなら、日本でも同じようなケガレを祓う意味をもつ村落行事の疫病送りや虫送り、都市祭礼の祇園祭などと、どこが同じでどこが違うのか、と興味を覚えたのである。

1990年と91年の現地でのパルドン祭りの見学は、もちろんまだ、筆者の民俗学研究活動の一環に位置づけられるものではなかった。日本での研究を進める上で何か新しいヒントや刺激を得られればそれで十分と考えていた。しかし、極東の島国日本から、はるかユーラシア大陸の西の果てブルターニュ半島に来て、初めてパルドン祭りを見学した筆者には、日本の疫病送りや虫送り行事との違いが強烈に印象的づけられた。パルドン祭りでは、人々の一年間の罪障を、幼子キリストを抱く聖母マリア像を担いだ聖なる行進と礼拝堂でのミサと懺悔によって町や村の領域内部で浄化しているのに対して、日本の疫病送りや虫送り行事では、隣村との村境まで藁人形を担いだ行進によって疫病や害虫を送り出し浄化している。山口県下の虫送りではサネモリサマと呼ぶ藁人形をリレー式に隣の村から隣の村へと送り出し、最終の村の海岸では「サバーサマ、カラ（唐）へ行け」といって海に流しているような例もある<sup>(3)</sup>。パルドン祭りの町や村が内部で浄化を完結させているのに対して、疫病送りや虫送り行事の村では外部への連結によって浄化を果している。つまり、フランスのそれが自己完結的なのに対して、日本のそれが他者依存的なのだ、さらにいえば、フランス社会が自己完結的なのに対して日本社会が他者依存的な体質をもっているのではないか、などとという想像をめぐらしたものであった。もちろん、これは単なる印象と仮想であって、論というにはほど遠いものに違いなかった。しかし、すべての儀礼が完了して教会に再び安置された古い石製の黒い聖母マリア像に、つぎつぎと接吻する人々の印象は強烈で、民俗文化に関心をもつ者として、異文化

研究・他文化研究の必要性がこのとき強く感じられたのである。

### 日本民俗学の異文化・他文化研究

柳田國男の民俗学が、その研究対象を日本列島に限定し、一国民俗学を主張したことについての評価は現在二つに分かれている。一つは、柳田の一国民俗学にナショナリズムとコロニアリズム（植民地主義）を見出して批判を加えるものであり<sup>(4)</sup>、もう一つは、柳田の一国民俗学は言語の資料性を重視する柳田民俗学の歴史主義に根ざすものであり、侵略膨張主義の時代にあってはむしろ一國主義に内在した不干涉主義の可能性が注目されるとする見解である<sup>(5)</sup>。論調としては一時期前者が注目されたが、その論拠に対する実証的批判が相次ぎ<sup>(6)</sup>、すでに前者の説得力は失われているといつてよい。

その柳田の時代は遠く過ぎ、現在では21世紀初頭の超情報化、超高速化の流動世界にあつて、経済のグローバリゼーションが人間集団の大量移動にともなうボーダレス化の状況を現出させている中であつて、日本の民俗学は新たな脱皮を試みはじめている。そして、日本列島の多様な民俗文化を世界的な視野でとらえようと、視線は列島内に展開している民俗文化の地域性や多様性へと向けられると同時に、列島外へと広く東アジア、東南アジア、さらには世界各地へと向けられようとしている。その民俗学にとって不可欠なのは、列島内諸地域へのこれまで以上の精密な調査分析であり、それをないがしろにして、外へ外へと関心を向けて先走るのは民俗学の歴史に対する単なる無責任というべきであろう。むしろ、列島文化の多様性への新たな視線を磨くためにこそ、列島外へと新しい視線を投げかけていくという姿勢が重要である。そして、その際、東アジア諸地域のように、古代以来日本列島と長期にわたって歴史的交流関係を重ねてきている地域を対象とする場合と、ヨーロッパやアフリカの諸地域のように、相互に地理的に隔絶し、歴史的にも直接的な交流が近現代以降に限定されている地域を対象とする場合との両者が考えられる。前者の場合には、歴史的交流関係と文化伝播の問題などに関する実証的追跡が可能な限りそれが重要であり、困難な学際的作業ではあるが、それだけに稔り豊かな研究成果が期待できる。一方、後者では、多くの場合、歴史的交流関係の追跡は不可能かつ無意味であり、むしろそれを超えて、相互の民俗文化の構造的な特徴の把握が目指されることとなる。前者と後者、いずれに向かうにせよ、安易な印象比較こそ厳に排されるべきであるが、現在の民俗学にとってその対象を広く世界に広げていくことに躊躇は必要ない。

### 西欧社会を対象とする民俗学

民俗学が対象としてきた民俗とは、柳田の造語である「民間伝承」である。その民間伝承とは、英語のフォークロアFolklore、フランス語のTraditions Populairesの訳語である。その英語のフォークロアFolkloreはもともと「民衆」を意味するフォークfolkと「知識」を意味するロアlore、の二つの古語から作られた語でそのままの意味で用いられるのであれば、民衆生活の知恵を研究対象とする学問、という意味になるが、実際には早くから民間説話の研究という狭い意味へと限定されてしまっている。したがって、生活文化伝承全体を対象としながらとくに歴史的な研究視角を重視する柳田のいうところの民間伝承とは大きく意味が異なっており、柳田の民間伝承はむしろフランス語のTraditions Populairesのほうが近い。しかし、そのフランスにおいても国内での民間伝承を対象とする研究は早くからその勢いを失っていった。

社会学の先駆者エミール・デュルケムEmile Durkheim (1858-1917) によって、従来の民族誌学を超越する新しいフランスの民族学が調査と理論の両方からその道を切り開いていったのとは対照的に、『通過儀礼 Les Rites de passage』1909、『現代フランス民俗学便覧 Manuale de Folklore Français Contemporain』1943/1982全九巻などを残したアルノルド・ヴァン・ジェネップArnold Van Gennep(1873-1957)の輝かしい活動を最後に、フランス民俗学は停滞へと向かってしまった。

しかし、第二次世界大戦後は、フランス南部のタラスコンのタラスク祭りの調査分析を行なったルイ・デュモンLouis Dumontの『ラ・タラスク』1951や、リュシアン・ベルノLucien Bernotとルネ・ブランカールRené Blancardの共著『フランスの一農村』1953など、従来いわゆる「未開」社会を対象として行なってきたフィールドワークを、「先進国」フランスの農村を対象として、その日常生活や親族構造、社会組織、ライフサイクルなどの調査項目を用意して行なう研究が現れてきている。また、フランス国立科学研究所CNRSも、民族学、歴史学、社会学の研究者を動員して、1955年の中部オブラック地方を最初とするフランス国内の本格的な村落調査を実施しはじめており、ほぼ10年ごとに精緻な報告書が刊行されてきている。そこには、フランスの民族学が従来のように「未開」社会だけでなく、「先進国」たる自国社会をも対象としてきている動きがみとれる。そして、これまでしばしば言われてきた「調査する欧米人民族学者・文化人類学者 対 調査されるアジア・アフリカ人」とか、アジア・アフリカの学者を「ネイティブ民族学者・文化人類学者」と呼ぶような、不公正な関係性の構図を克服する機運が少しずつ世界規模で起こっている。日本の民俗学も、世界へ向けて相互の研究交流を積極的に推進し研鑽を積むべきときが来ているのである。

## ②……………ブルターニュのトロメニ

フランスのブルターニュ半島一帯に伝えられている宗教的な伝統行事パルドン祭りLes Pardonsに類似したもので、より大規模な伝統行事がトロメニLa Troménieである。2002年現在、ブルターニュ半島西部のコルヌアイユ司教区Cornouaille régionとレオン司教区Léon régionの三ヶ所に伝えられており、最も有名なものが、ドゥワルヌネ湾を見下ろせる海拔285mのMenez Lokornと呼ばれる山稜の中腹に位置し1920年以来、伝統的な町並み景観を保存することに成功して観光地としても知られているロクロナンLocronanのそれである。そして、残りの二つが、今も農村地域の景観を見せているコルヌアイユ司教区Cornouaille région内陸部の小さな村ランドロウLandeleauのそれと、ブルターニュ半島西部最大の都市であり軍港としても知られるブレストBrestの近郊の町グエヌウGouesnouのそれ、である。

このトロメニに関する著名な研究者であり、筆者たちの研究協力者でもあるブレスト大学のドナシアン・ロウランDonatien Laurent教授によれば、かつてトロメニが行なわれていたのはこの三ヶ所<sup>(7)</sup>以外にも数ヶ所があったという。それは、司教座聖堂参事会員ペロンP.Peyronが調査したというブルザネPlouzané、ランデルノーLanderneau、ロクマリア・カンペールLocmaria en Quimperであり、また、ラルジエールに依拠して加えることができるという、ブルブリアックBourbriacと、ギ

セニー Guissény, またさらには、司教座聖堂参事会員ポンダヴァンPondavenとアブグラルJean-Marie-Abgrallが19世紀初期まで行なわれていたと指摘しているロクエノーLe Locquénolé, アンヴィックHenvic, トーレTauléという三つの小教区が一緒になって順番に行なっていた一例である。

しかし、2000～2002年の現在の時点で筆者たちが実際に確認できたのは上記のロクロナンLocronan, ランドロウLan-deleau, ゲヌウGouesnouの三例のみであり、その他はすでにすべて廃絶していた。たとえば、プルザネPlouzanéを訪れた筆者たちが出会うことができた1958年生れのBernadette Treguerは、子供の頃、ちょうど今から三十年くらい前までは行なわれていたが、その後廃れてしまい現在ではまったく行なわれていないと語ってくれた。そのプルザネPlouzané在住の研究でブレスト大学のジャン=フランソワ・シモンJean=François Simonが提供してくれた資料によれば、1969年のトロメニが最後であったと考えられる。そして、その廃絶の最も大きな理由は、当時のPlouzanéの教会の神父がトロメニの行事に対してきわめて否定的であったためであり、それに抗してでも実施し維持していこうとする住民たちの動きが見られなかったためであるという。そして、すでに現在では、トロメニの再興の可能性はないであろうとシモンはいう。

本稿では、筆者たちが実際に参加し観察し聞き取りすることができた上記の、ランドロウLan-deleau, ゲヌウGouesnou, ロクロナンLocronanの三つの事例を紹介し、若干の分析を試みることにしたい。

### ③……………ランドロウのトロメニ La Troménie de Lan-deleau

#### (1) 伝説の語るトロメニ

**Saint - Théleau サン・テロ** Lan-deleauは2002年現在、人口1,050人の村である。このLan-deleauという名前は古いケルト語で「隠者の庵」あるいは「隠棲修道士の修道院」という意味の‘lan’と5, 6世紀にイギリスから海を渡ってブルターニュに伝道にやってきた聖人たちの1人であるサン・テロSaint-Théleau, ブルトン語のThéloの名前からきている。Chanoine Louis Kerbiriou “Lan-deleau dans la Cornouaille des Monts”<sup>(8)</sup> 1942によれば、12世紀にウェールズの伝記作家によって編まれた伝記に次のようにあるという。テロThéloはウェールズのルランタフの司教聖デュブリス(412年没)の弟子で、デュブリスの後継者に選ばれたが、ペストがその地方を襲い、彼はアルモリカ半島つまりブルターニュ半島をめざして航海することになった。彼はエルサレムに巡礼を行ない、鐘が贈られた。その鐘は病気を治す力があるとされ、さらにその鐘の前ではうその誓いができず、魂が神のもとへと上っていけるようにと絶えず鳴っていたという。ほかにも、不思議な話が伝えられている。ある日、テロThéloは、住民たちの3分の1を殺してしまった翼のある蛇からアルモリカの国を救ってくれるように頼まれた。天から靈感を受けたThéloはその蛇を攻撃した。自分のストラをその首にかけて海に投げ落としてしまった。このような偉業は他の多くのブルターニュの聖人の伝記でもみられるが、当時の森には猛獣がはびこっており、それらの動物は異教のシンボルでもあったという。2002年のトロメニを見学に来ていたブレスト大学の大学院生Joel Hascoetは、現在もウェールズではThéloは教会の回りに住む人を守る力がある、また神様と話すことができる、などといわれているという。

**トロメニの由来** Chanoine Louis Kerbiriou “Lan-deleau dans la Cornouaille des Monts”

<sup>(9)</sup>  
1942年には、もう1つのフランスに伝えられている聖人伝説が紹介されている。それによれば、Théloはかなり長い間ポエールの森に滞在していたらしい。この地にやってきた彼は最初メネツ・グラツに家を建てるつもりだった。彼は礎石を立て、屋根代わりに平らの石を置くまでしたが、礼拝の邪魔をされるほど隣の沼のカエルの鳴き声がうるさかった。Théloはこの地に固執したが、カエルの鳴き声はThéloが祈ることも寝ることもできないほどひどいものになった。仕方なく場所を移した彼は、泉に近い木立の中に木板で小屋を建てた。次いで教会を建て、それを中心に小教区を組織するための土地の取得を望んだ。そしてこの地の領主であるカステル・ガル卿にその計画を伝えた。卿は次のように答えた。「おまえが1晩のうちに回れるだけの土地をやろう。つまり、どこにしようと夜明けを告げる雄鶏の声が聞えた瞬間に立ち止まるのだぞ」。Théloは家に帰ると、身の回りの世話をするために少し前から来ていた妹にその話をした。彼女はうわべでは喜んでいたが、心の底では激しい嫉妬を抱いていた。そのことを知らぬまま、Théloは戸口に立ち、口笛を吹いた。すると1頭の鹿が木立の中から出て来て、彼の足元にひざまづいた。これから彼が所有するであろう土地の境界線を定めるために、神が遣わした動物である(中略)。日が落ちるとThéloは鹿に乗って全速力で駆け出した。しかし、カステル・ガル卿の城館の地所を通りかかった時、彼めがけて犬の群れが放たれた。聖人はやっとのことで樫の木に逃げ延びたが、鹿は森の中に走り去ってしまった。妹が陰險な邪魔をしなければ、Théloはその遅れを取り戻したにちがいない。というのも、彼女は鶏小屋からとってきた雄鶏を煙突の中に押し込み、火床にあった柴の枯れ枝の束に火をつけたのである。その雄鶏は煙から逃れようと羽根をばたつかせ、悲痛な鳴き声をあげた。それにつられるようにして、村中の家禽たちが鳴き声をあげ、それは農家から農家へと伝わり、領主との約束通りにThéloの足を止めることになった。もしそれがなければThéloの教区はコロレックCollorecからクレダンCledenまでの広がりをもつものになっていたであろう。

赤鹿 この記述では、Théloは鹿に乗って教会から樫の木のところまで行ったが、樫の木の上で夜明けを迎えてしまったことになっている。しかし、現在の村人たちの話、たとえば、神父のPierre Mahe(1937年生)によれば、次のように語られている。城の城主がThéloに一晚で歩いた範囲の土地を与えるといった。しかし、城主の妹は嫉妬深い人だったので、Théloに向けて犬を放した。Théloは樫の木に登って犬から逃れた。彼を助けに赤鹿がきたので、Théloはその赤鹿に乗って続きの道を廻ることができた。

## (2) 現在のトロメニ

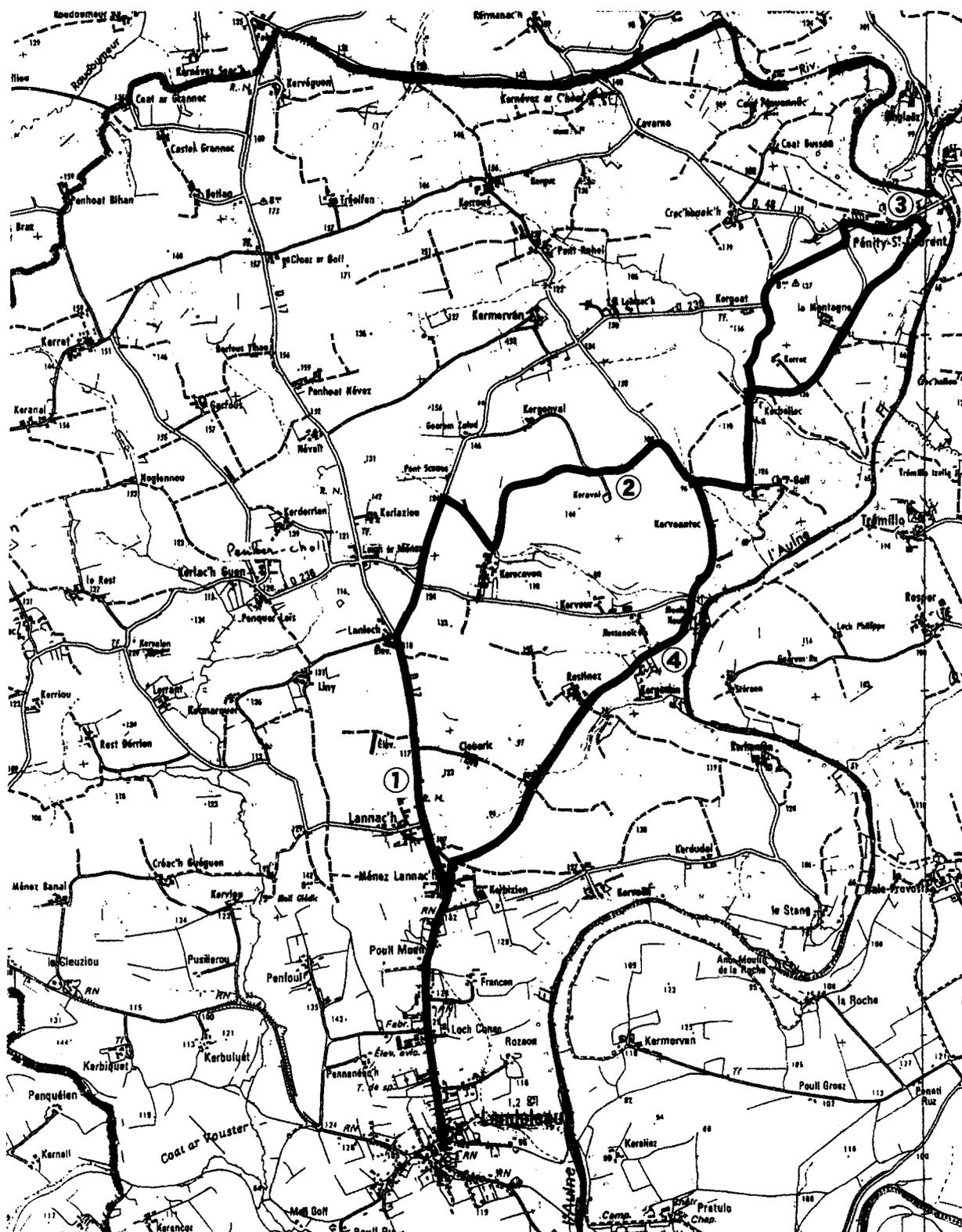
Pentecôte聖霊降臨の主日 Landeleauでは現在も、復活祭後7度目の日曜日、Pentecôte聖霊降臨の主日に、ThéloつまりSaint-Théleauが廻るとされる順路をたどるトロメニが行なわれている。2001年の場合は6月3日、2002年の場合は5月19日であった。Pentecôteにあわせて年によって日程は変わることになる。神父のPierre Maheによれば、Landeleauではとくにトロメニのプロセシオンを‘Tro ar Relegou’「聖遺物の巡回」といい、Saint-Théleauの聖遺骨reliquesとともに、Saint-Théleauが廻ったのと同じ道を進むことが重要とされている。Saint-Théleauの聖遺骨は、このLandeleau以外にも、イギリスの3つの村に伝えられているというが、Landeleauではとくに腕の骨が教会に保管されている。その聖遺骨は金メッキをした2頭の鹿に四方を支えられた錫製の長方

形の聖遺物箱に納められている。

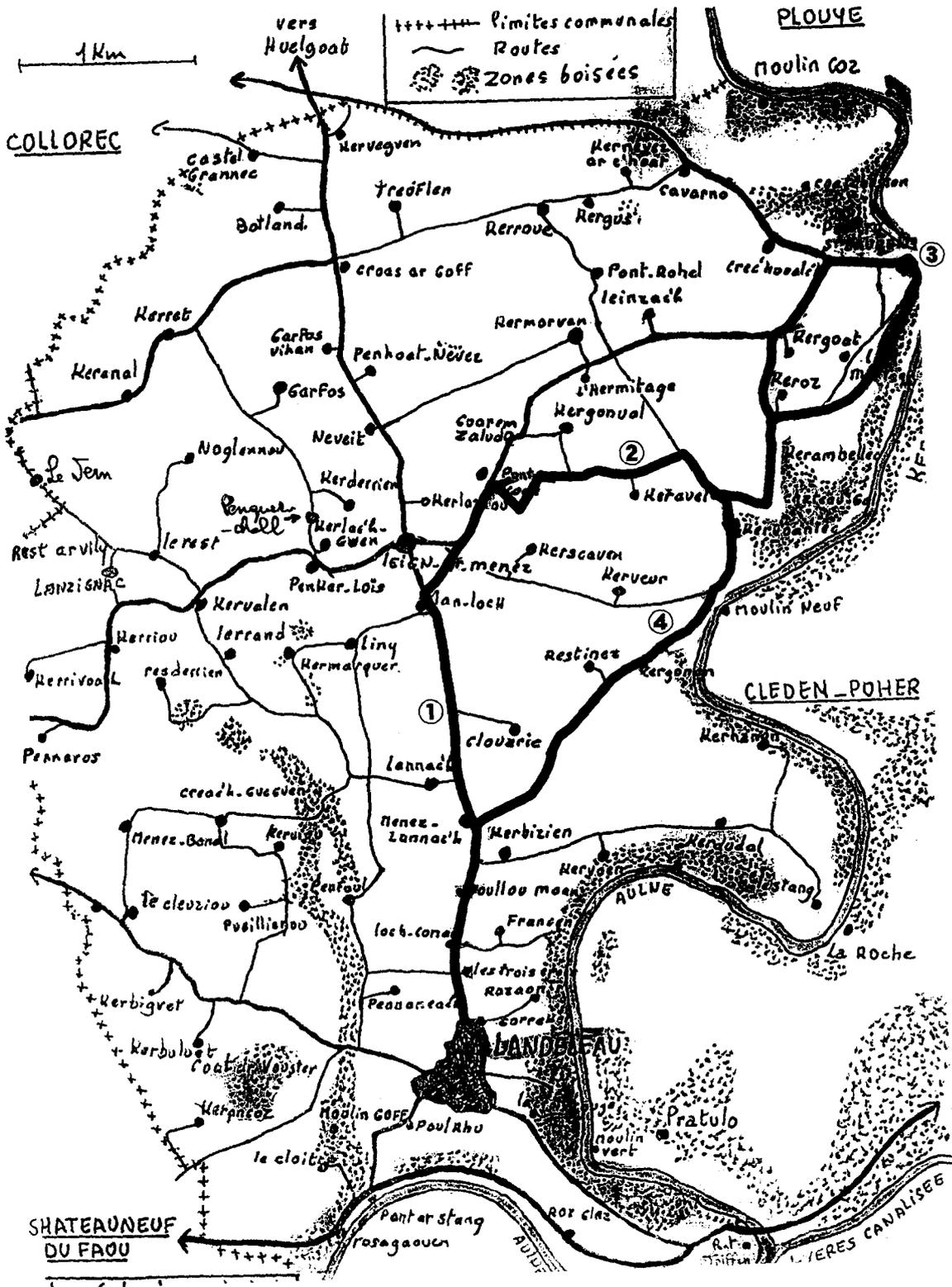
**死者の家族** Landeleauの住民あるいは出身者で、その1年のうちに家族に死んだ人がいたら、このトロメニでSaint-Théleauの聖遺骨を安置した輿を2人で交代しながら担ぐことになっている。1926、27年までは、聖遺骨の輿、十字架croix、聖像statue、バニエールbannièresなどを担ぐために希望者はお金をたくさん支払う必要があった。そのために聖遺骨は家族に死者がいる場合でしかもお金を多く出した人が担いでいた。しかし、1909年からそれを嫌がるようになった。これらは‘Journal 1900-1968’というLandeleauの教会の歴代の神父が記録しているノートからの情報であるが、1926、27年以降は、お金ではなく、聖遺骨の輿を担ぐのは、家族に死んだ者がいる人が交代で、また十字架、聖像、バニエールを担ぐのは、年齢を基準として、表Iのように決められた。そして、Saint-Théleauの聖遺骨の輿を担ぐ条件は、家族に死んだ人のいる人、癌で死にそうな家族がいる人、病気が治ったからその感謝の気持ちを伝えたい人、などである。2002年のトロメニでは、3週間前に息子が死んだという年配の男性が最初から最後まで聖遺骨を担ぐことを希望し、彼とその家族が主に担いだ。トロメニには、昔は戦争で亡くなった人のために大勢が歩いていたという。また、Saint-Théleauを助けた鹿の伝説に関連して「鹿が死んだ人の霊を運ぶ」という信仰が語られている。家族を亡くした人たちは、このトロメニに参加することによって死者の霊を慰めるという意味があるように観察される。

**Bannièresバニエール** トロメニの始まる前、教会に集まってきた人々は建物のまわりを3周歩いて回る。そして午前8:00に神父、十字架croix、聖遺骨reliquesを安置した輿、バニエールbannièreや聖像statue、町の人々ら約270人が連なり、プロセションが始まる。教会からまず北方へ向かう。行列の進む順路に面する家々では道路に色鮮やかな花々を撒いて装飾し、プロセションを迎える。聖遺骨reliquesを安置した輿がやってくると、その下をくぐる高齢者たちが多い。こうするとリューマチに効くといわれている。

午前11:00からPenity Saint-Laurentのペニティでミサが行なわれる予定のため、午前中に8kmの道のりを歩かなければならない。途中で2つのスタシオンへ立ち寄り、祈りと讃美歌を捧げる。Penity Saint-Laurentのペニティでは屋外ミサが行なわれ、その後、昼食の時間がとられて、午後2:00に一行はふたたびペニティを出発し、1つのスタシオンで祈りと讃美歌を捧げ、教会までの復路約7kmを歩く。この合計約15kmの道のりは、平坦地ばかりではなく、山道があり、麦畑の中にこのトロメニのために麦を刈り取って作った一本道や、牧草地などを通るものである。そのため、最近では重量のあるバニエールと聖像とは教会から約1kmのところにある集落のはずれのFranlenという地名の場所にある倉庫の前いったん置いて行くことになっている。帰路、ここを通る時にもう一度それらを持って、教会までのプロセションをパイプオルガンの楽隊とともに行なうのである。しかし、十字架と聖遺骨を安置した輿だけは15km全行程を同行する。昔は重いバニエールや聖像も全行程をプロセションしていたが、今は道が狭いし、泥だらけだから置いて行くのだという。そのバニエールにはこんな伝説がある。ある年、カステル・ガルの城主がバニエールを城に一泊させたことがあった。そのとき村人たちがバニエールを城に置いて帰ったら、夜中に教会のカリヨンが鳴りだし、人々が外を見るとバニエールがひとりで帰ってきていたという。城主はSaint-Théleauに犬をしかけた人だからバニエールは城にいたくなかったためだろうと村人たちは語り合ったという。



— : プロセシオンの順路  
① ~ ④ : スタシオン



————— : プロセシオンの順路  
 ① ~ ④ : スタシオン

表 I

Croix d'or (金の十字架)	60歳の男性
Statue de la Vierge (聖母マリアの聖像)	60歳の女性
Statue de Saint-Joseph (聖ヨセフの聖像)	50歳の男性
Statue de Notre-Dame (聖母マリアの聖像)	50歳の女性
Bannière de Saint-Théleau (サン・テロのパニエール)	40歳の男性
Bannière de la Vierge (聖母マリアのパニエール)	40歳の女性
Bannière du Sacré-Cœur (サクレ・クールのパニエール)	20歳の男性
Petite bannière de la Vierge (聖母マリアの小型のパニエール)	16~17歳の女性
Bannière de Sainte Thérèse (サン・テレーズのパニエール)	14歳と15歳の女性

表 II

スタシオン
①ラナシュLannac'hのシャベル跡
②檜の木 'Chêne de Saint- Théleau'
③サン・ロランのベニティPenity Saint - Laurent
④サン・ロッシュSaint-Rochのシャベル跡

**第1のスタシオン** 第1のスタシオンは、Lannac'hという地名の場所である。ここには1926年までシャベルが存在したが、今は何もない。トロメニの行事が行なわれるときにNotre-Dame-de-Bonne-Nouvelleの聖像だけが道路のわきに安置される。ここで祈りが捧げられ、讃美歌が歌われる。また、この付近の家の人たちは行列が着くとすぐに聖遺骨の輿の下をくぐる。

**ドルメン** このトロメニの順路からははずれているが、この近くのLandeauランドロウとHuelgoatユルゴートとの間に巨石のドルメンがあり、「Saint-Théleauのテーブル」とか「Saint-Théleauの家」と呼ばれている。地面から約1mの高さの4つの脚で直径3~3.5mのほぼ円形の厚みのある石を支えている。現在、このドルメンは畑のなかにあり、トロメニではドルメンを遠巻きにした道を選んで歩き、ドルメンには行かない。司祭が行ってはいけないと言ったという。

**檜の聖樹** 第2のスタシオンは、「Chêne de Saint-Théleau」と呼ばれる大きな檜の木の場所である。犬に追いかけられたThéloがここの檜の木に登ったと伝えられている。この木の根元近くに仮の祭壇が作られ、聖遺骨を安置して、「Pardon」の意味の特別なミサが約20分行なわれる。現在の檜の木は樹齢約300年ほどであるが、この先代の木は樹齢600~700年くらいのものだが枯れてしまったという。昔からこの檜の木の小さな木片を削り取ってお守りとして持ち帰る人が多い。火事から守ってくれるお守りだといわれている。このようなお守りをキリスト教カトリックは禁止したが、今では神父も仕方なく、よいと認めている。Pierre Mahe神父は、この檜の木を人々が信仰の対象としていることについて、クリスチャンイズム以前の信仰、5、6世紀からのものか、ケルト



Landeleauの町を背に出発するプロセシオン。



プロセシオンを迎える道路に面した家では路上にきれいな花々を敷いて歓迎する。



Saint Théleauのテーブルと呼ばれるドルメン。



聖遺骨reliquesの輿の下をくぐる人たち。



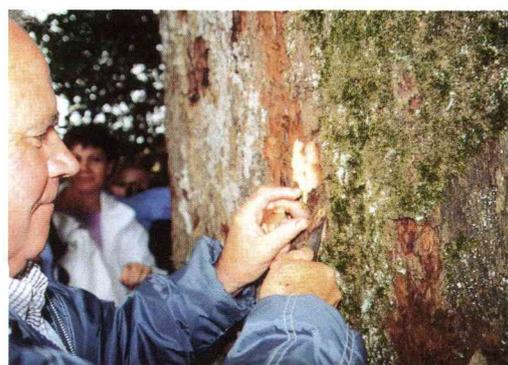
トロメニの順路は麦畑の中にも伸びている。その部分の麦を刈り取って道を作り、プロセシオンは進む。



第2のスタシオンとなる榎の木の聖樹。



榎の木の下祭壇に聖遺骨reliquesを安置して特別なミサが行なわれる。



榎の木の皮を削る人たち。火難除けのご利益があるという。



息子を亡くした遺族が聖遺骨reliquesの輿を担いで牧草地を進む。



Saint Théleauの聖遺骨reliques。



Penity Saint-Laurentを出発して復路へ向かうプロセション。



復路, バニエールを捧げてLandealeuの町へ向かうプロセション。



パイプオルガンの独特な音色の伴奏とともにLandealeuの町へ帰ってきたプロセション。



シャベルの入口で、聖遺骨reliquesの輿の下をくぐる人たち。



トロメニに先立って行なわれた順路の草刈り。



順路の草刈り。

教やドルイド教では樅の木が聖樹として大きな意味をもっているので、その宗教による儀式の名残りかと思っているという。

**Penity Saint - Laurent** その後、一行は小さな泉水の前の小道を通り、カステル・ガル Kastell Goall(Breton)、シャトー・ガルChâteau-gal(Français)の城館の前を曲がって山道を通り抜けて牧草地を通り、3番目のスタシオンであるPenity Saint - Laurentのシャベルへと向かう。昔、Lanleleauには7つのシャベルがあったという。その一つは第1スタシオンのLannac'hのシャベル、二つめは第4スタシオンのSaint-Rochのシャベル、三つめは教会の鐘樓の7～8手前の墓地の中に1884年以前まで建てられていたというSaint-Théleauの小礼拝堂で、現在のLanleleauの教会の入口付近に「Saint-Théleauのベッド」といわれている石棺状のものが置かれているが、これがその墓地の中に建てられていた「Saint-Théleauの小礼拝堂」の中にあつたものだとされている、四つめは墓地の下に位置していた聖モデの礼拝堂で、1748年の小教区の記録簿によれば、荒廃が原因で取り壊しが検討されミサも行なわれなくなったという。取り壊された後も人々はその狭い跡地に病人の飲み物や薬を撒いたり、傷や潰瘍に当てられた湿布などを置き続けていたという。そして、五つめはランジニャックのトリニテ教会の礼拝堂、六つめはサン・ジャンの礼拝堂、そして七つめがPenity Saint-Laurentの礼拝堂である。これらの内6つは廃墟となり、このPenity Saint-Laurentだけが残ったといわれている。Penity Saint-Laurentのシャベルはペニティとも呼ばれ、呼称は混同しているが、建物の内部には14世紀のものといわれているSaint-Laurentの聖像とSaint-Rochの聖像とがある。1904年まではもう一つの聖像もあつたらしいが盗まれてしまったという。

**ペニティの修復** 1942年頃に『司教区歴史考古学紀要』に発表されたマドレーヌ・デロゾ「これが最後のトロメニか」という論文<sup>(10)</sup>には、このPenity Saint-Laurentの荒廃ぶりが描かれているが、その後、司祭と村人の努力で修理が行なわれた。そして、トロメニの際、このペニティで行なわれるミサのために、祭壇を用意したり花を飾り付けたりする奉仕を、Le Camという家族Familleが毎年行なってきた。しかし、1990年頃この家族が村を出ていったため、その後は、Corbel, Toutec, Massonの3家族の女性と2002年から参加したPichonという家族の女性と4人で世話をしている。トロメニの前日、ペニティの壁や聖像を掃除してきれいに装飾し、Lanleleauの家々の庭から花を集めてきてアレンジしている。1人はフラワーアレンジメントのクラスで勉強した経験のある女性で、昨年写真を見ながらアレンジメントを行なっていたが、写真を参考に理由については「去年と少し違うようにするために見ているのよ。同じ材料を使ってもどこか変えるようにしているわ」と説明してくれた。

**復路のもてなし** Penity Saint-Laurentのシャベルでのミサが終わり、昼食の休憩をとった後、午後2:00にそのシャベル、ペニティを出発すると、一行は道路から坂道へと進み、それを登って畑の間の道を歩き、シャトー・ガルChâteau-galの城館の前を通るなど、往路と一部は同じ道を通り、小さな泉水の近くのX路を左に鋭角的に曲がり、4番目のスタシオンへと向かう。その手前には、一行に飲み物を提供する1軒の農家がある。100年くらい前からこの家は一行のためにシードルの樽を一つ開けてきたというが、今は家の中に人々を招き入れてワイン、ジュース、水などをふるまっている。第4のスタシオンは、Saint-Rochのシャベル跡である。そこでも祈りと歌が捧げられる。

**教会への帰還** この後、一路、プロセシオンは町へと向かい、Franlenの倉庫の前から往路で置

いていったバニエールや聖像を取り出して、町の教会へと行進していく。パイプオルガンの楽隊の演奏とともに晴れがましく教会に帰り着くと、建物の入口では聖遺骨の輿が両方から高く掲げられ、人々はそれに手をふれてから聖遺骨の下をくぐって中に入る。ラテン語のミサが行なわれ、参列者一人一人による聖遺骨へのキスがなされてトロメニは終了する。

**準備の草刈り** このLandeleauの教会にはfabricienと呼ばれる祭りの世話役は決められていない。神父とボランティアがトロメニの準備や進行を行なっている。2002年5月19日のトロメニの準備として、15日にプロセションで一行が歩く道の草刈りが行なわれた。草刈の仕事は、Landeleau, Collorec, Spezetの3つの村communeから、parroisse（教区）から3人とmairie（地区）から3人ずつが出て行なう。2002年の場合、parroisse（教区）からは、Pierre Le Gall, François Cochenec, Geruroin Claustreの3名、mairie（地区）からはYves Baraher, François Jeffroy, Guy Rivoal (Adjoint au Mairie助役)の3名が出た。朝9:00に草刈り用の鎌と叉木を用意して、町役場mairieの前に集合し、LanlochとPont ScoaeとKergoatの近くの3カ所の、通常使われていない、荒れた小道の草刈りを行なった。12:00頃、ペニティの庭の草刈りを終えた後、みんなで近くに住むGuy Rivoal (Adjoint au Mairie助役)の家に立ち寄り、庭でアペリティフを飲み、神父の家に立ち寄ったのち、隣り町のレストランで慰労を兼ねた昼食をとった。

**素朴なトロメニ** 1942年頃、トロメニに参加した前述のマドレーヌ・デロゾという人物による記録がChanoine L.Kerbiriou “Landeleau dans la Cornouaille des Monts” 1942に一部紹介されているが、その中に次のような記述がある。「知名度や参加者数ではプルザネ、グエヌウ、ロクロナンのトロメニには及ばないが長さや趣では決して劣らない。何よりもここには観光客がいない。Landeleauと近隣の小教区の信者たちが参加するだけである。聖霊降誕祭の朝8時、4つの組鐘の調和がとれ威勢のよい響きと歌声の中、教会にあふれかえる人々の間をかきわけながら、2頭の鹿の上に置かれ、担架にしっかりと付けられたささやかな聖遺物箱が進んで行く。それは道中ずっと同じ2人の小教区の間によって担がれるが、彼らの脇には皮をはいだハシバミの杖を持った2人の友人がお供する。押し寄せる群衆や、行き過ぎた行動に走る巡礼者を抑えるのがその友人たちの役目である」、そしてその道中には「トロメニには参加できなかったが、運び手が親切に持ち上げてくれた聖遺骨の下を通して、守護聖人への信仰心を表したいという人々が集まってくる。トロメニの行程の途中には、しばしばくるぶしまで浸かってしまうほどの、飛び越えることができないような泥濘があったり、何度も小川を渡らなければならないこともあるが、その間も讚美歌の歌はやむことはない。32詩節とリフレインからなる聖人を称える歌である」。この光景は筆者たちの参加した2002年のトロメニにおいても多くの部分が共通していた。

## ④……………グエヌウのトロメニ La Troménie de Gouesnou

### (1) 伝説の語るトロメニ

**Saint-Gouesnou** ブルターニュ半島西部の港町であり軍港でもあるブレストBrest、この都市は第2次世界大戦でアメリカ軍による猛爆撃を受け、壊滅的な打撃を受けた。そのBrestから北方約7kmの郊外にGouesnouという町がある。この町は、Plabennec, Bourg-Blanc, Guipavas, Bohars,

Guilersなどと境を接している。Gouesnouという名称は、Saint-Gouesnouという聖人の名前に由来する。

Yvonne Guirriec (1921年生) という patrimoine (教会などの文化遺産を守る組織) のメンバーの1人によれば、次のような伝説が語られている。西暦630年に18歳の若いGouesnouが家族と一緒にイギリスからブルターニュへとキリスト教の布教のためにやって来た。母はすでに死亡していたが、父はSaint Thudonという聖人で、弟はSaint Majan, 妹はSainte Tudonaといった。Gouesnouは修道院を建てた。その場所は、Langoeznou, つまり lieu consacrés 世俗のところではない、と呼ばれた。

**教会と泉水** 現在、町の中央にある教会はGouesnouの修道院の上に建てられたと考えられている。そして、教会の北側にある泉水は修道院の頃にはすでに存在していたといわれている。この土地では水が不足していたので、Gouesnouが神に水を祈ったところ、そこを掘れば水があるといわれ、泉水を見つけた。そのおかげでこの土地では水のない年はなくなったという。Gouesnouは人の病気を治す聖人ではないが、泉水はリューマチに効くという。太陽が昇る前に泉に行き、痛いところを水に浸す。最近では、ドイツからきた神父が両肘を浸していた。また、泉水は赤ん坊の肌の病気に効くので、おかあさんは布を水に浸してから赤ん坊の肌をふく。今もこれらの伝統は生きている。

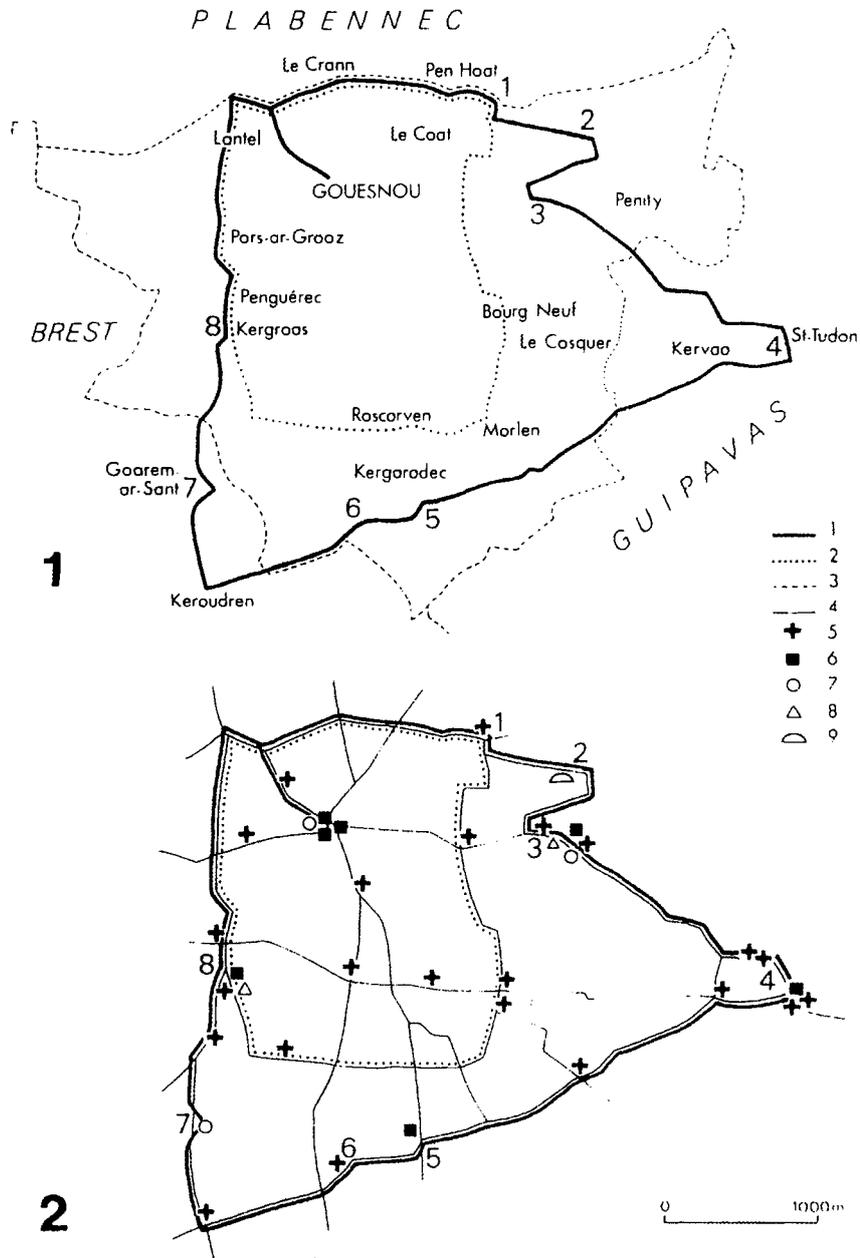
Gouesnouは675年にQuimperléで死んだ。その時、Gouesnouの弟がやって来て、兄であることを確認し、évêqueのいる St.Paul de Léonに埋葬された。当時、教会が聖遺骨reliquesを保有することによって、神聖性sacréを獲得できると考えられ、聖遺骨がよく売買されていた。Gouesnouの教会には1789年のフランス革命以前にはSaint-Gouesnouの頭蓋骨と指先が銀製の箱に納められていたといわれているが、現在は指先だけが伝えられている。

**トロメニの由来** Gouesnouの教会には、この聖人の功績を伝える伝説とトロメニと呼ばれる伝統行事が伝えられている。ドミニコ会修道士で17世紀に聖人伝説の収集を行なったアルベール・ルグラン「聖人の功績についての伝説とは」<sup>(11)</sup>によれば、次のような内容である。Saint-Gouesnouは彼への資金提供者であったコモール伯爵に『1日で溝で囲める限りの土地を与える』と言われて、牧草用の農具のフォークを手に取り、「それで地面を引きずりながら、ブルターニュ里で約4里を四辺形に歩いた。先が分岐したこの農具を引きずるごとに大地が、不思議なことに両側に盛りあがって大きな溝を形作り、彼の資金提供者の土地と彼に与えられた土地とをみごとに分けたのである。その囲い地に含まれた土地を耕そうとする者もいなかったらしい。それは、この場所を冒瀆しようとした者たちには罰が当たって急死してしまうことが何度もあったからである」。

**産業地区の造成** 伝説ではSaint-Gouesnouが農具のフォークを引きずりながら歩いて1日で囲める限りの土地の所有を認められたというが、現在の市街地の範囲とSaint-Gouesnouが歩いたといわれる範囲とがまったく一致しているわけではない。なぜなら、Gouesnouの町は大都市Brestの近郊に位置するため、Guipavas飛行場の建設、Brestへ向かう自動車専用道路の建設、産業地区の造成、郊外型大規模ショッピングセンターの建設、などが第二次大戦後にさかんに行なわれたため、伝説上7世紀にSaint-Gouesnouが歩いたといわれる範囲と21世紀初頭の現在の市街地の範囲とは一致していない。Gouesnouの市街地とGuipavasの飛行場とが接する一帯は立ち入り禁止になっており、またGouesnouの南方の林野が開拓されて産業地区が造成されたことによって、そのエリアも



# LA TROMENIE DE GOUESNOU



- |                                      |  |
|--------------------------------------|--|
| 1) Tracé de la troménie de Gouesnou  | 6) Eglise et chapelles existantes ou disparues |
| 2) Tracé du minih primitif           | 7) Fontaines dédiées à saint Goeznou           |
| 3) Limites de la commune de Gouesnou | 8) Chaise et lit de saint Goeznou              |
| 4) Routes et chemins                 | 9) Vestiges de tumulus                         |
| 5) Croix existantes ou présumées     |  |

Bernard Tanguy "La Troménie de Gousnou" 1994より

Gouesnouの範囲として認識されるようになったため、市街地の拡張とともに新しく設定された境界もSaint-Gouesnouの歩いた道として柔軟に解釈されている。そのため、Saint-Gouesnouはブルターニュ里で4里、約16km歩いたといわれていたものが、現在では延長されてその距離は約18kmとなっている。

## (2) 現在のトロメニ

**Jeudi de l'Ascension** 人々は1年に1回、毎年復活祭の39日後のJeudi de l'Ascensionの日にこの道を歩く。2001年の場合は5月24日(木)に行なわれたが、2002年の場合は5月9日(木)に行なわれた。平日であっても必ずJeudi de l'Ascensionの日にトロメニが行なわれる。トロメニには神父も参加する。教会には引退したドイツ語教師François Diverresが神父としてつとめているが、1997年以降、体が弱いので全行程18kmは歩けないため、トロメニの時だけはPlougastelの30歳代の若い神父Olivei Manauに来てもらっていた。しかし、2002年にはBrestの若い神父がはじめて参加して全長18kmを歩いた。

**聖遺骨reliquesを担ぐ役** 2002年5月9日、早朝、5:00に教会でのミサが行なわれ、その後、教会のボランティアの人たちが用意したケーキとコーヒーを少し食べて、6:00まだ朝暗いうちからプロセションが始まった。十字架croix 2本と聖遺骨reliquesの輿が担がれ、神父も同行する。十字架を持ち聖遺骨の輿を担ぐのは、現在では希望者が交代しながら行なっているが、1960年代以前は、十字架はChampsavainという城主が1人で持ち、聖遺骨reliquesは徴兵前の18歳くらいの若者が4人で交代しながら担ぐものと決まっていた。当時はトロメニには1家族から少なくとも1人が参加するという程度で約50人が参加していた。そのうち徴兵される若者は15人くらいだったという。しかし、1960年代から70年代にかけてGouesnouの人口が1,500人から、6,7,000人に急増したため、トロメニの参加者も約300~400人くらいに増えた。また、その間に城主も城を売却した。そこで、希望者が交代で十字架を持ち、聖遺骨の輿を担ぐというかたちへと変わった。

Gouesnouの子供がトロメニに最初に参加するのはだいたい14歳である。Certificat d'études(初等教育終了後の試験)を受ける者が最近では聖遺骨を担ぐようになっている。トロメニは5月、卒業試験は6月なので、「合格するように」という気持ちで担ぐという。

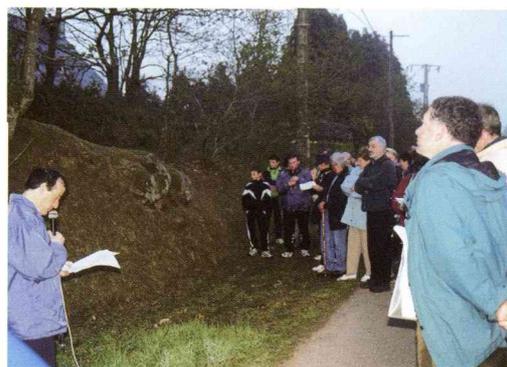
**Gouesnou人になる** トロメニにはGouesnouの住人とGouesnou出身の家族たちがこの日に帰っ



農具のフォークを引きながら進む  
Saint-Gouesnouを描いた刺繍絵。



第2 スタシオンの古墳の前。



第3 スタシオンの「Saint Gouesnouの椅子」の前。



Guipavas飛行場ができたために滑走路に沿って長い迂回路を進むプロセシオン。



第4 スタシオンのSaint Tudonの礼拝堂跡地での小さなミサ。



第6 スタシオンのKergaradecのカルヴェール。



新しい産業地区を進むプロセシオン。



第7 スタシオンのChapelle de Kéraudren。



第7スタシオンを過ぎて北上するプロセシオン。



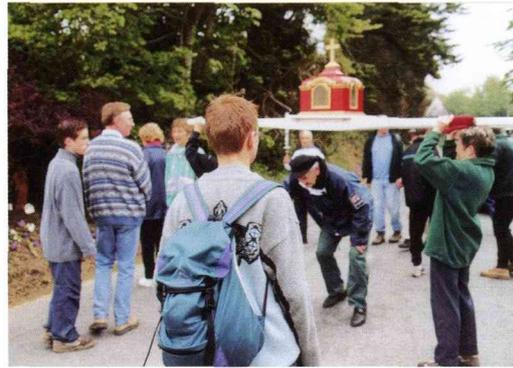
「Saint Gouesnouの泉水」で水を飲む人たち。



第8 スタシオンの聖母マリア像。



第9 スタシオンのPenguérec。



Saint Gouesnouの聖遺骨reliquesの輿の下をくぐる人たち。



バニエールを捧げてGouesnouの町へ帰ってきたプロセション。



Saint Gouesnouの聖遺骨reliques。



Saint Gouesnouの教会の北側に隣接する泉水の前を進むSaint Gouesnouの聖遺骨reliques。



Saint Gouesnouの教会の前をいったん通り過ぎて第10スタシオンのSaint Memorのカルヴェールへと向かうプロセション。

てきて参加している。2002年の場合、参加者は305人と発表された。そのプロセシオンには老若男女が普段着で参加し、比較的早い速度で歩いていく。このGouesnouのトロメニのほか、LanleleauもLocronanもみなそうなのだが、プロセシオンに参加する人々の足は老若男女ともに非常に速い。とくに日本人の筆者たちにはそれが非常に印象深かった。景色を楽しむ散歩ではなくまきに行進なのである。そのように急ぐ理由をGouesnouでは、「11:00の教会のミサに間に合うように帰らなければならないからだ」という。また、「Gouesnou人になるために一度はトロメニに参加する。トロメニに参加したら、死亡後、Gouesnouに墓をもらえる」ともいわれている。

この約18kmの間に10箇所のスタシオンstationsと呼ばれる祭壇が設けられている。このGouesnouのトロメニの責任者として中心的な世話をしているのは、海軍を引退した後、教会での奉仕活動を行なっているRobert Roudaut（1940年生）さん夫妻である。彼のリードのもと、それぞれのスタ

表Ⅲ スタシオンの位置と数

<p><b>1980年頃 11箇所（町の博物館の展示資料）</b></p> <p>①La croix de penhoat            ②Goarem-ar-Chapel(<i>tumulus</i>)            ③Kador saint Goueznou(<i>socle de croix</i>)            ④Croix de Saint Thudon            ⑤Croix de Kervao            ⑥Croix de Kergaradec            ⑦Chapell de Kéraudren            ⑧Goarem-ar-Zant(<i>fontaine</i>)            ⑨N.D. de Bon Voyage (<i>emplacement d'une chapelle</i>)            ⑩Penguérec (<i>monument commémoratif</i>)            ⑪Croix de Streat-ar-Chapel</p>
<p><b>1984年 8箇所（Bernard Tanguyの調査時点）</b></p> <p>①Penhoatのカルヴェール            ②古墳            ③Saint Gouesnouの椅子            ④Saint Thudonの礼拝堂跡            ⑤ビレヌブ村の東            ⑥Kergaradecのカルヴェール            ⑦Saint Gouesnouの泉水            ⑧Kergroasのシャベル跡</p>
<p><b>2002年 10箇所（筆者たちの調査時点）</b></p> <p>①Penhoatのカルヴェール            ②古墳            ③Saint Gouesnouの椅子            ④Saint Thudonの礼拝堂跡            ⑤kervao村西端のカルヴェール            ⑥Kergaradecのカルヴェール            ⑦Chapell de Kéraudren            ⑧Kergroasのシャベル跡            ⑨Penguérec            ⑩Saint-Memorのカルヴェール</p>

シオンで人々は十字架と聖遺骨を前にして祈りを捧げ、讚美歌やSaint-Gouesnouをたたえる歌を歌う。その10箇所のスタシオンについては「キリスト教よりもcroyances populaires民俗信仰に関する場所」と考えられている。

**プロセシオン** まず、プロセシオンは教会を北西方向へ出て、町外れで鋭角的に東方へ曲がり、GouesnouとPlabennecの境界となっている古い道を通して Penhoatペノワットつまり「林の終わり」の意味の場所へと向かう。Penhoatにあるカルヴェールが第1スタシオンである。現在ではここで、トロメニへの参加の動機について、運動のため、人とつきあうため、挑戦、信仰など、そのすべての理由のどれか1つでもよい、信仰でなくても尊重する、という意味のLecteurからの話があり、神父による祈りが捧げられて、‘Vivons en enfants de lumière’の歌が歌われた。プレスト大学のBernard Tanguyによれば、<sup>(12)</sup>かつてはカルヴェールのまわりを3回ずつ十字架と聖遺骨がまわり、‘O crux ave’,つまり、O「おお」crux「十字架」ave(avere)「幸福であれ、元気であれ」の歌が歌われたという。

**境界の石** それから、自動車道路の下に作られたトンネルをくぐり、南方へと向きを変え、約1kmほどの畑の中の道を歩いて、Goarem-ar-Mean-Hars（境界石のgoarem）と呼ばれる畑の向かいに着くと、その一角で立ち止まる。Goarem-ar-Chapelと呼ばれるtumulus（古墳）の遺跡の場所である。これが第2スタシオンである。ここでは、Lecteurから「生産の成績向上と環境の尊重とを合わせ行なわねばならないが、それは難しい」というような意味の生産の増大と環境保護問題についての話があり、神父による祈りが捧げられ、‘Un grand champ à moissonner’という収穫に関する歌が歌われた。そのあと、飛行場建設のために順路が一部変更された、Guipavasとの境界の道を通してKador Saint-Gouesnou（Saint-Gouesnouの椅子）と呼ばれる表面に窪みがある四角形の石のところまで行く。これが第3スタシオンである。これはカルヴェールの台石だという見方もあるが、一方では「Saint-Gouesnouが農具のフォークを引きずりながら歩いた時に腰掛けて休んだ石」ともいわれている。ここでは石の前でLecteurが「生命の意味について、時には世界の困難を忘れて安心して自分の生命の意味を考えねばならない。そのような時間を作ることは大切である」などと話し、神父による祈りが捧げられ、‘Comme un souffle fragile’という歌が歌われた。

**第4スタシオンSaint-Thudon礼拝堂跡地** このGouesnouからGuipavasへの道を、現在では飛行場を迂回しながら進み、Saint-Thudon 礼拝堂跡地へと行く。ここが第4スタシオンである。木々で囲われた礼拝堂跡地にはカルヴェールが1つ立っており、その前でLecteurによってSaint-François d’Assiseを称える詩が唱えられ、‘Psaume de la création’が歌われる。第2次大戦後は行なわれなくなったが、それ以前はここでGouesnou からのプロセシオンとGuipavasからのプロセシオンとが合流し、第5スタシオンまで1区間を一緒に行進したという。

Bernard Tanguy “La troménie de Gouesnou” dans “Annales de Bretagne et des Pays de l’Ouest” ,t.91-1984-numéro <sup>(13)</sup> 1によれば、Saint-Thudon礼拝堂跡地で2つのプロセシオンが合流するとGouesnouの教会の聖遺骨とGuipavasの教会の聖遺骨との2つが建物の残骸部分の石の上に並べられて信者たちのキスを受け、それから2つのプロセシオンはkervao村の西端に位置してGouesnouとGuipavasの境界を示すカルヴェールまで一緒にプロセシオンを行ない、祈りを捧げてもう一度聖遺骨にキスをして別れたという。またこのSaint-Thudon礼拝堂は18世紀初頭にはすでに

廃墟となっていたが、その敷地内は神聖な場所とされ、靴を脱いで裸足でしか入ることができなかったという。

**産業地区を進む** 第5スタシオンはkervao村の西端、GouesnouとGuipavasの境界を示すカルヴェールである。Lecteurに12歳くらいの女の子が選ばれ、トロントで開かれる予定のカトリックの若者の集会JMCの準備の話題が話された。そして「若い人もカトリック人として活躍しなければならない」と語りかけると、神父が「若者を手伝いましょう。若者を力づけていきましょう」と結んだ。そして‘Source d’espérance’の歌が歌われた。参加者の一人は、この神父の言葉には最近のフランスの若者たちをめぐる問題が含まれていると話しかけてきた。次の第6スタシオンはKergaradecのカルヴェールである。これはBrestとGouesnouの市街地の境界を示す地点である。第7スタシオンはChapelle de Kéraudrenである。ここにはTrémodan城のシャベルがあったが、退職した司祭の住まいになり、その後1960年に現在の建物が建てられた。この住所はBrestになっている。Lecteurが「仕事や働く姿勢への宗教の言葉を聞きましょう。仕事は生活をよくするためにある」と語ると、神父が「失業者と将来について、失業している人々の将来への不安をもらってください、と神様にいしましょう」と話した。そして‘Nous avons vu les pas de notre Dieu’の歌が歌われた。このVilleneuve村の東にはAr-Vezen-Voulous「ピロードの木」と呼ばれる小さな広場があったといわれる。ある年のトロメニの日、天気が悪かったため神父がプロセシオンを行なおうとしなかった。すると、十字架とバニエールがひとりで教会を離れてプロセシオンを始め、この木の茂みにまで来ていたという伝説が伝えられている。

**Saint-Gouesnouの泉水** 一行はその後、Goarem-ar-Zant（「千の原」の意味）の農場の向かいの草原にあるSaint-Gouesnouの泉水に行き、祈りを捧げて湧き出ている泉水を飲む。この泉水には病気から人々の生命を守る力があるという。この泉水は昔はスタシオンといわれていたが、今はスタシオンとはみなされていない。第8スタシオンはKergroasのシャベルであったが、シャベルは廃墟になったため、プロセシオンの際は、緑の木々の枝でおおわれたヒュッテ（小屋）が建てられ、その前の石の上にマリア像が安置される。ここではLecteurが聖母マリアを称える詩を読み、神父も聖母マリアへの賛辞のあと、E.A.P(Equip d’Animation Pastorale)というカトリックの活動や神父不足などカトリック教会が抱えている問題についての話があり、「活発なカトリック人として暮らしてください」と参列者たちに語りかけた。そして、‘Le premiere en chemin, Marie’の歌が歌われた。

**新設の第9スタシオン** 第9スタシオンはPenguérecという場所で、第2次大戦中の1944年にドイツ兵によってGouesnouの住民42名が人質となり、1軒の農家に押し込められて虐殺されたという家の向かいの道路端に建てられた追悼碑とカルヴェールが対象とされている。かつては北のLantelを經由してそのまま町へ戻っていたが、これは第2次大戦後、新しくスタシオンとして加えられた場所である。ここではLecteurが1944年8月7日にここで虐殺が行なわれたことを確認し、戦争と平和について語った。その辛い思い出は人々にとっては「すでに終わっていること」という意識が強いため、この話のなかで過去の戦争のことにはふれられず、2002年現在進行しているイスラエルとパレスチナの戦いについて、戦争の犠牲となっている国民やエルサレムとパレスチナの辺りのTerre sainte墓地など、キリスト教徒にとってつらい事件のある聖地についての話があった。そ

して、信仰の自由が認められていないためキリスト教が迫害されていることなどが話された。神父からも戦争と平和についての話があり、‘Ta paix sera leur héritage’の歌が歌われた。

**町への帰還** それから町の入口に位置するLantelという場所につくられた新しい墓地の前の広場でプロセシオンの一行はいったん立ち止まり、収蔵庫から聖人像を刺繍したバニエール6本を出して、再び教会を目指して出発した。一行が見えると教会のカリヨンが高らかに鳴らされ、カリヨンの音が鳴り響く道路を十字架、聖遺骨、バニエールとともに人々がプロセシオンを行なった。

教会に入る前に、教会の北側に近接するSaint-Gouesnouの泉水の前で立ち止まり、祈りが捧げられる。この時、聖遺骨の輿の下をくぐる人が多い。くぐるとリューマチが治るといわれている。それから、一度教会の前を素通りして、町の南方へ向かい、chemin de la Troménie（「トロメニの道」という名前の小道）を通して、Streat-ar-Chapelleという場所の、Saint-Memorのカルヴェールの場所へと行く。このカルヴェールの足元には「Saint Gouesnouの石」と呼ばれる周囲約5m、厚さ約60cmで、真中に10～15cmの丸い穴があいた石が横たわっている。伝説では、Saint-Gouesnouが贖罪の苦行として、何時間もそこに片腕を固定していたと伝えられており、その石は四肢の病を治してくれると信じられている。

**Saint-Gouesnouの石** この「Saint-Gouesnouの石」は現在ではすでに消滅してしまったSaint-Memorの礼拝堂の屋外に置かれていたもので、1865年にGouesnouの教会財産管理委員会に譲渡されたものと記録されているという。これが第10スタシオンである。ここでは人々は全員が聖遺骨reliquesの輿の下をくぐって、それに手で触る。全部で300人くらいが次々と1人ずつ行なった。ここで、Lecteurによって、Gouesnouの人々から寄せられた次のような祈りの言葉が次々と読み上げられ、1つ1つに対して全員で祈りを唱えた。1.ある家族はすごく病気で悩んでいる。病気の家族、死にそうな人がいる。手伝ってください。2.ある家族でun petit enfant（赤ちゃんまたは小さい子供）が亡くなった。その悲しみを軽くしてあげましょう。3.エルサレムの聖地で悲しい事件があった。早く終わるように。4.パキスタンで亡くなった2人の犠牲者、海軍工廠（l’Arsenal）の技師を悼む。テロ事件で亡くなった人への祈り。5.教会は新しい組織に再編成されつつあり、果すべき大きな目的がある。これからすることとしては5つある。信仰の根源に戻ることに、グループの活発化、神父になること、政治家を呼び政界に信仰を広めること、など、それらができるように祈りましょう、等々。それらのあとで、トロメニが終ることが告げられ、‘oh ou Seigneur en ce jour écoute nos prières’の歌が歌われた。神父からは、歩くことで神と対話できたことへの感謝と祈りが捧げられた。

**教会への帰還** そして、教会へと戻りその門を入ると、すぐには教会の中へは入らずに教会の敷地内の墓地を回る。そして、正面の入口ではなく、北側の裏口から入り教会の長椅子に着くと、Lecteurと神父から、トロメニが無事に終わったという感謝の言葉が述べられ、‘Cantique de Saint-Gouesnou’という聖人の歌がブルトン語で歌われてすべてが終わった。

これらの各スタシオンで捧げられる祈りは、あらかじめGouesnouの人々から希望が出され、それをトロメニの責任者であるRobert Roudautが原稿にまとめておいたテキストを読む形式で行なわれている。各スタシオンでのLecteurの役目はその場でRobert Roudautが指名したり、あるいは希望する者がつとめる。

スタシオンの変更      なお、スタシオンについては、先のBernard Tanguy “La troménie de Gouesnou” 1984<sup>(14)</sup>には、Guipavasの飛行場とBrestへの自動車専用道路ができて変更される前のトロメニの経路が記されているが、ここでは、スタシオンは、1：Penhoatのカルヴェール、2：Goarem-ar-Chapel（古墳）、3：Kador-Sant-Goeznou（Saint Gouesnouの椅子）、4：Saint-Thudon（礼拝堂跡地）、5：Villeneuve村の東、Ar-Vezen-Voulons「ピロードの木」と呼ばれる小さな広場、6：Kergaradecのカルヴェール、7：Goarem-ar-Zantの農場の向かいにあるSaint Gouesnouの泉水、8：Kergroas（聖母マリアのシャベル跡）の計8箇所とされている。このうち第5スタシオンについては、1860年にCariouが残した覚書によれば「Coz-Ribin村の向かい、正確な場所を示すものは何もない所」が第5スタシオンとなっていたというから、カルヴェールなどの目印は存在していなかったことがわかる。また、Penguérecにおける1944年の大量虐殺を追悼してスタシオンが設けられているが、これは前述のように新しいものであり、かつてはLantelを経由してそのまま町へと戻っていた。そして、教会に入る前にSaint Gouesnouの泉水の前で立ち止まり、Pater（主の祈り）、Ave（天使祝詞）、Gloria（グロリア）を唱え、それから、Saint Memorのカルヴェールで‘O crux Ave’を歌うと記されているが、これらについてはとくに第9、第10のスタシオンとは位置づけられてはいない。2002年の例では、PenguérecとSaint-Memorのカルヴェールの場所がスタシオンとされており、スタシオンの位置づけが異なっている。このほかにも、第5スタシオンは1860年の時とはちがいがあまいではない。Kervao村の西端でGouesnouとGuipavasの境界を示すカルヴェールが建てられている。一方、第7スタシオンについては、現在ではChapelle-Kéraudrenとされており、Goarem-ar-Zantの農場の向かいにあるSaint Gouesnouの泉水はそこにも立ち寄るものの、泉水への祈りは捧げられず、「この泉水はスタシオンではない」とされている。トロメニの責任者として奉仕しているRobert Roudautによれば、Gouesnouのトロメニは1789年の革命の時代と第2次大戦の時を除き、毎年必ず行なわれていると語り伝えられているというが、スタシオンの場所やその位置づけについては少しずつの変化がみられたことがわかる。

**Saint pissou**      このGouesnouのトロメニは全長約18kmという長距離であるため、途中で‘Saint-Gouesnou, saint pissou.’「Saint-Gouesnouがおしっこをする」という言葉が伝えられている。このトロメニでは必ずその途中で雨が降るといのである。2002年の場合も、ブルターニュ地方特有の気候でよくあることだが、確かに雨が降ったりやんだりしていた。

## ⑤……………ロクロナンのトロメニ La Troménie de Locronan

### (1) 伝説の語るトロメニ

大小2つのトロメニ      Cornouailleコルヌアイユ地方の中心都市カンペールQuimperから北へ約20kmのところに、Locronanという町がある。ブルターニュ地方西部では珍しく丘の上に築かれた町で、教会を中心とした町の一面は中世的な町並みを残していることで知られており、訪れる観光客も多い。観光客がまず訪れるのは教会である。Locronanの教会の側廊にはペニティpenityと呼ばれる礼拝堂が隣接しており、このペニティには聖ロナンの墓廟がある。16世紀にブルターニュのアンヌ王女Anne de Bretagneが子授けを聖人ロナンに特別に祈ったところ、何人もの子供に恵まれた。

そこで、そのお礼にロナンに捧げるペニティを建立したと言いつたされている。Locronanを訪れる観光客たちへ町の歴史の説明をボランティアで行なっている Jean-Yves Nicot (1930年生) によれば、Locronanはブルトン語で 'nemeton' (空の下の教会) といい、キリスト教以前のケルト時代における聖なる地、すなわち「聖なる場所」を意味するという。

現在、Locronanは人口約800人で、彼らのほとんどが参加する祭りが7月に行なわれるトロメニである。トロメニには、プチ・トロメニ *petite troménie* とグラン・トロメニ *grande troménie* の2つのタイプがある。Donatien Laurent 'La troménie de Locronan; Rites, espace et temps sacré'<sup>(15)</sup> 1989 によれば、Locronanの教会に保管されている古文書から最も古い資料の日付は1587年で、それ以来、トロメニは定期的に6年ごとに催されているという。1587-1593-1599-1605-という年次ごとである。そして、小トロメニについては19世紀末以前の記録は見当たらないとされる。このDonatien Laurentの示す古文書には、トロメニが「6年ごと」あるいは「7年周期」という表現があるというが、近年でも2001年、その前は1995年、1989年というように6年ごとに1回の周期で行なわれてきている。

**トロメニの語源** このトロメニ *troménie* の語源については、Donatien Laurentはブルトン語の *tro minihi* からきた語であるとして、*minihi* つまり修道院の囲い地を *tro* するつまり一巡するという意味であるとしている。一方、民間伝承的な語源説では *tro mene* で、山の一巡を意味するものと言いつたしている。

現在では、毎年7月の第2日曜日にプチ・トロメニ *petite troménie* が行なわれている。町の教会に隣接する聖ロナンの墓廟のペニティから、海拔285mの *Menez Lokorn* と呼ばれる山稜の、*Plas ar c'horn* 角の場所と呼ばれる山頂にあるもう一つの聖ロナンのシャペルを目指してプロセションが行なわれる。この距離は約5kmである。これは聖ロナン *Saint Ronan* が月曜日から土曜日まで毎日歩いた散歩道といわれている。

それに対して、6年ごとに1回、7月第2日曜日から第3日曜日に、行なわれているのがグラン・トロメニ *grande troménie* である。これは、Locronanだけでなく、Locronanと境界を接する、*Kerlaz*, *Plonévez-Portzay*, *Quéménéven*, *Plogonnec* という4つの地区 *communes* をはじめとして、近隣の町や村から約7,000~8,000人の人々が参加して行なわれる盛大なものである。このグラン・トロメニ *grande troménie* でプロセションが行なわれるのは、聖ロナンが毎週日曜日に歩いた散歩道といわれる約12kmの順路である。この順路には高低差があるのが特徴で、最も高い所はLocronanの東南に位置する海拔285mの *Menez Lokorn* と呼ばれる山稜の山頂部であり、最も低い所はLocronanの西北に位置する海拔68mの湿地帯である。

**トロメニの順路と *kazeg vaen* 石の牝馬** このトロメニの順路には、聖ロナンに因む伝説がいくつか伝えられている。プロセションはまず聖ロナンのペニティから出発し、広場の南西角の *Lann* の小道を通り、西に約500m下る。それから北方へ向かい、そして次には東方へと向かう。そして、南へと方向を変え、*Menez Lokorn* と呼ばれる聖なる山稜へ登り、その頂上の *Plas ar c'horn* に建てられているロナンのシャペルに至る。その後、西に尾根道を下り *Quimper* と *Châteaulin* を結ぶ古代ローマの街道の交差点へ出る。それから *kazeg vaen* 石の牝馬と呼ばれる周囲約13mの巨石が横たわる場所を過ぎ、やがて聖ロナンの教会と墓廟へと帰り着く。この順路の途中にある *kazeg vaen* 石の牝馬

については、kador sant Ronanロナンの椅子ともいわれており、ロナンが散歩の途中で一休みした場所という伝説もある。そして、この巨石の窪みに女性が腰掛ければ子供に恵まれるという伝承が現在も根強く伝えられている。前述のJean-Yves Nicotによれば、巨石はもと3個あったが、そのうち2個は家を建てる時の材料として切り出され、現在では、1個しか残っていないのだという。そして、この巨石は上から見れば巨大な男性のファルスphallus géantに見えるともいう。Jean-Yves Nicotのいう3個の巨石については、その存在が確かに認められている。1つはこのkazeg vaen石の牝馬、もう1つはMenez Lokorn頂上にあった巨石、そして、Menez Lokornの南側山麓のBourlanと呼ばれるところにあった3つの小さなメンヒルで、それには斜めに傾いた3本の十字架が刻まれていたという。1929年に撮影された写真では、巡礼者たちはBourlanのメンヒルの周りを太陽の方向に三周したり、接吻したりしている様子がわかる。しかし、現在ではkazeg vaen石の牝馬だけが残されており、他の2つは存在しない。

現在のトロメニにおいては、この巨石は正式な祭祀の対象となっておらず、プロセションでは神父たちはただ通り過ぎるだけである。しかし、参加者のほとんどはこれに腰掛けることによって子供が授かるという信仰のことは知っており、何人かの女性は本気とそうでない場合との両者が見受けられるが、確かに腰掛ける人たちがいまもいる。Donatien Laurentが引用している『教区討議記録簿』に記録された1887年のトロメニの報告書には「司祭たちはkazeg vaenの前を通った。信者たちは周囲を回っていた」と記されており、人々は教会の司祭たちの指導とは別に、これに反しても聖なる巨石への信仰をその周囲を3回まわるとか接吻するなどの行為によって示していたことがわかる。

性悪女ケバン 伝説といえば、もう一つ、性悪女ケバンの伝説も注目される。プロセションの順路のなかにある、聖ロナンの遺骸を運んだ牛の歩いた道についての伝説である。聖ロナンが、のちにSaint-Brieucでエヴェックévêque司教となって亡くなった時、3つの教区つまりCornouaille, Léon, Vannesの3つの教区がロナンの聖遺骨を欲しがった。そこで、聖ロナンの遺骸を荷車に乗せて白い野生の牛に自由にひかせた。すると、牛はこのLocronanへと帰ってきた。その時、聖ロナンを怨んでいたケバンという性悪女が、ちょうど自分の家のあるKernevez, 旧地名Tro-baloのStiffの谷で小川のほとりで洗濯をしていた。彼女は聖ロナンの遺骸が帰ってきたことを怒って、洗濯に用いる槌で牛に一撃を加え、葬列の車を引く牛の1頭の角を折った。しかし、牛たちはTro-baloから聖ロナンの日曜日の散歩道をたどってまだ進み続け、角は山上に着いた時に落ちた。そこがPlas ar c'hornである。このPlas ar c'hornとは、Tro-baloからなお聖ロナンの遺骸を運んでいた牛たちが突然立ち止まり、Cornouailleコルヌアイユ伯爵が、神の啓示を得て、この聖なる隠者に、「谷とその隠棲所の間に含まれるすべての土地と、隠棲所の周辺すべて」をロナンの永久所有地として与えるまで先に進むことを拒んだ場所である、と聖ロナンのラテン語伝記は伝えている。

一方、ケバンはKernevezの洗濯場からロナンの聖なる葬列に付いてきていたが、Plas ar c'hornの山頂部から尾根道を下ったところにある、PlogonnecとLocronanとの境にあたる場所で大地が左右に裂けて呑み込まれてしまったという。そこは、Bez Kebenケバンの墓、と呼ばれており、そのしるしにカルヴェールが建てられているが、誰もその周りを一巡などしないし、十字を切るものもまったくいない。昔はここを通りすぎるとき、軽蔑のしるしにこのケバンの十字架に向かって必ず

石を投げつけていたものだという。

**Plas ar c'horn角の場所** Menez Lokornの山頂部はPlas ar c'horn角の場所と呼ばれ、トロメニが出發して約8 kmの地点に位置する。Locronanで最も高い地点であり、西にSainte-Anne-la-Paludの入り江に波打つ大西洋の海が見晴らせるところである。ここに現在のシャペルが建てられたのは1913年のことで、それよりはるか以前には、ジョセフ・ロトJoseph Lothが引用しているジョセフ・キランドルJoseph Quillandreの間接証言によれば、「高さ約1 mで、渦巻き状の蛇形の模様で飾られた聖石」があったらしいと、Donatien Laurent 'La troménie de Locronan ; Rite, espace et temps sacré'<sup>(16)</sup> 1989 はのべている。

**6年ごとのトロメニ** また、Donatien Laurent 'La troménie de Locronan;Actualité d'un pèlerinage millenaire'<sup>(17)</sup> 1987 によれば、教会の古文書類には、「saint René聖ルネ (Ronanのフランス語名) の全体プロセシオン」(1599), 「聖ルネの巡歴と呼ばれる公式プロセシオン」(1635), 「俗にtro an menechyと呼ばれる聖ルネのプロセシオン」(1641,1653), 「聖ルネの7年周期のプロセシオン」(1647), 聖ルネの大パルドン祭あるいはトロメニ」(1665), 「Grand Tourmeny大トロメニ」(1706) などの記述がみられ、これらが現在まで続くグラン・トロメニgrande troménieの伝統を証明しているという。そして、前述のようにLocronanとPlogonnecの教会財産管理委員会の報告書が言及している最も古い年代は1587年であり、古文書によっては「7年ごとに」という記事もみられるが、1587-1593-1599-1605-1611-.....-1983と確実に6年ごとに行なわれてきていることが追跡できるという。

## (2) ヒュッテhuttesと世話役

**4つのコミューンcommunesと12のスタシオンstations** 聖ロナンのパニティを出發して、西へ、北へ、と順次、ほぼ四辺形を描くように辿るトロメニの順路の向こう側には、たがいに境を接する4つのコミューンcommunesが存在する。西のKerlaz, 北のPlonévez-Porzay, 東のQuéménéven, 南のPlogonnecである。そして、この四辺形の順路には12箇所のスタシオンstationsと呼ばれる「休憩祭壇」が設置されている。スタシオンには、キリスト受難像を描くカルヴェールや、それより古い時代のもといわれるクロワcroixと呼ばれる高さ約1 m程度の石の十字があるのが普通である。カルヴェールは第2, 第3, 第5, 第6, 第7, 第11, 第12の7カ所に、クロワは第1, 第4, 第8, 第9の4カ所に確認できる。そして第10はロナンのシャペルであるが、それは前述のようにもとは巨石であった。6年に1回のトロメニの期間にはそれぞれのスタシオンの標識には、カルヴェールやクロワの近くに青と黄色の三角形の小旗が掲げられる。そして、スタシオンのカルヴェールやクロワの場所には、ヒュッテhuttesと呼ばれる仮設祭壇も設置される。ヒュッテとは、樅、木蕨、糸杉などの木の枝を利用して作る高さ約1.5m程度の聖人像を安置した緑色の小屋のことである。第1スタシオンにはSaint Eutrope, 第2スタシオンにはEcce Homo, 第3スタシオンにはSaint GermainとSaint Even, 第4スタシオンにはSainte Anne, 第5スタシオンには, Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelle, 第6スタシオンにはSaint MiliouとSaint Michel, 第7スタシオンにはSaint Jean, 第8スタシオンにはSaint Guénole, 第9スタシオンにはSaint Ouen, 第10スタシオンにはSaint Ronan-Plas ar c'horn, 第11スタシオンには Saint Théleau, 第12スタシオンにはSaint

Maurice (2001年は設置されず), と, それぞれ聖人をまつるヒュッテが設置される。

**聖人をまつるヒュッテhuttes** これら12箇所のレストランに設置されるヒュッテ以外にも順路の途中にはおびただしい数のヒュッテが作られる。2001年の場合, 約12kmの順路に合計38箇所のヒュッテが作られた。Locronanからはもちろん, それだけでなく周辺のKerlaz, Plonévez-Porzay, Quéménéven, Plogonnecのそれぞれの町や村の教会やシャベルから持ち寄られる聖人像を安置した小さな祭壇である。数えてみると, ヒュッテは, Locronanのものが21箇所, Kerlazのものが1箇所, Plonevez-Porzayのものが4箇所, Quéménévenのものが5箇所, Plogonnecのものが7箇所, 作られていた。そのヒュッテを設置したり, トロメニの期間にヒュッテ内に座って聖人に付きそったり, ヒュッテを飾る紫陽花などの花を毎日取りかえる役割を負う人たちには, 4つのタイプがあった。第1は, その責任者となる家族familleが1家族あるいは数家族が代々決まっているタイプである。第2は, ファブリシアンfabricienと呼ばれる教会やシャベルの世話役的な責任者夫婦が行なうタイプである。第3は, アソシアシオンassociationと呼ばれる教会やシャベルの管理や運営を行なう組織が行なうタイプである。そして, 第4は, 有志が行なうというタイプである。

**ヒュッテhuttesを世話するfamille, fabricien, association** Locronanの場合, 教会が, l'église de Locronanの1つと, シャベルが, chapelle de Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleとchapelle de Saint Ronanの2つがあり, それらに安置されている聖人像が21箇所のヒュッテに出されていたが, その世話をする家族familleが代々決まっているのが17例, ファブリシアンfabricienが中心となつて行なうものが3例, アソシアシオンassociationが行なうのが1例, であった。Kerlazの場合, 教会, l'église de Kerlazが1つあり, その守護聖人Saint Germainをまつるヒュッテが1箇所出されて有志が交代で世話をしていた。Plonevez-Porzayの場合, 教会が, l'église de Plonévez-Porzayの1つと, シャベルが, chapelle de Notre-Dame-de-la-ClartéとChapelle de Sainte-Anne-la-Paludの2つがあり, それらからヒュッテは4箇所出された。教会やシャベルのファブリシアンfabricienが世話をするのが3例, 有志が行なうのが1例であった。家族familleが代々決まっている例はない。Plonévez-Porzayの守護聖人Saint Miliiauについては, 教会のファブリシアンが世話をしている。

Quéménévenの場合, 教会が, l'église de Quéménévenの1つとシャベルが1つ, Chapelle de Kergoatがあり, それらからヒュッテは5箇所出された。家族familleが代々決まっているのが4例, アソシアシオンassociationが行なうのが1例である。そのなかで, 教会に保管されているQuéménévenの守護聖人Saint Ouenの聖像が運び出され, それについてはアソシアシオンの15人が交代で世話をしているが, シャベルから出された4つの聖人像についてはそれぞれ担当するfamilleが1~3家族ずつ定められている。

Plogonnecの場合, 教会l'église de Plogonnecが1つとシャベルが6つ, Chapelle de Saint AlbainとChapelle de Saint ThéleauとChapelle de Sezuec, Chapelle de LoretteとChapelle de Saint ThégonnecとChapelle de Saint Pierreがある。それらから, ヒュッテは7箇所出された。そのうち, アソシアシオンassociationが世話をするのが5例, 有志が行なうのが2例であった。教会に保管されているPlogonnecの守護聖人Saint Thurienのヒュッテには有志が交代で詰め, 各シャベルについては, 原則としてはそれぞれのシャベルにアソシアシオンが存在する場合にはそれが中

心となって世話をするという傾向がみられる。アソシアシオンが存在しない場合には、シャペルの近隣に住む地区の有志が世話をしている。ただし、特定の家族*famille*が代々聖人像の管理を行っていたが、約10年位前からアソシアシオンの手助けを受けるようになったという例も1例あった。

**聖人の大集合** つまり、Locronan周辺のPlonévez-Porzay, Kerlaz, Quéménéven, Plogonnecの4つの町や村からは必ず、それぞれの守護聖人像が持ち出されるとともに、シャペルなどでまつられている聖人たちも1つずつヒュッテを作ってロナン・トロメニを行なう人々に見せるという形がとられているのである。そして、ヒュッテの配置には規則性があり、Locronanの町の中のヒュッテにはLocronanの教会に保管されている聖人たちのヒュッテが作られ、周辺部では、西側にはKerlazの教会やシャペルの聖人たち、北側にはPlonévez-Porzayの教会やシャペルの聖人たち、東側にはQuéménévenの教会やシャペルの聖人たち、南側にはPlogonnecの教会やシャペルの聖人たちのヒュッテが多く作られるかたちとなっている。つまり、各村の聖人たちが大集合して、自分の村とLocronanとの境界線に勢揃いしているのが特徴である。ヒュッテはスタシオンとは異なり、トロメニのプロセシオンの最中、一行が特定のヒュッテの前で祈りを捧げるとか讃美歌を歌うなどということは行なわれず、人々が任意で祈り献金を行なうだけである。

**トロメニの運営** トロメニの運営は、聖堂区主任司祭、教区協議会の5人の常任委員、教会財産管理委員会を構成する4人のファブリシアンらが中心となって行なう。Locronanの住民から選出されるファブリシアンは、Bonne-Nouvelleのファブリシアン、Rosaireのファブリシアン、Trépassésのファブリシアン、グラン・ファブリシアンの4名である。2001年の場合、Notre-Dame-de-Bonne-NouvelleのファブリシアンはMarianne Sobel、Notre-Dame-de-RosaireのファブリシアンはJean Le Queau、TrépassésのファブリシアンはLouise Pitoy、グラン・ファブリシアンはPierre Douilがつとめていた。この4人のうち、グラン・ファブリシアンが、トロメニにおいて、十字架を持つ者、バニエールや聖遺骨、ロナンの鐘を持つ者などの人選を行ない、プロセシオンを組織する全体の責任者となっている。7月の第2日曜日と第3日曜日とに公式トロメニが行なわれるが、それぞれ、1回のトロメニにおけるバニエールの担い手だけでも、交代しながら持つため、1旗につき約12名が必要になる。バニエールは10旗余りあるので、人口約800人の町で、バニエールの持ち手だけでも合計約200人もの奉仕が必要なのである。

**柔軟な組織運営** 1989年のトロメニを見学したChristiane Vilainは、<sup>(18)</sup> 'Locronan et sa troménie; L'affirmation d'une identité' 1990において、6年に1回のトロメニの運営がLocronanの住民たちの自発的意思と奉仕の精神によって行なわれるため、ファブリシアンはそのような柔軟な組織を維持しなければならないといい、ファブリシアンと住民との信頼関係の重要性について、次のように述べている。

「1989年、新しいグラン・ファブリシアンのルネ・ルブータンRené Rouboutinは、『同意したものは、全員任命された。かつては、主任司祭が、職権で旗手を任命し、日曜日に説教壇から告げていた。任命されたら何も言えなかった！勝手に欠席することもできなかつたろう！』と語っている。今日では、事態は変わっている。伝統的な階級制は形の上では残っているが、より柔軟な組織に道を譲っている。恐らくこちらの方が、Locronanの住民が、自分達が本当に団結している状況やそれが抱える障害などを感知しやすいだろう。1年前から、『私がトロメニに携わるのはもう問題

ではない』と言っている人々がいる。でも、トロメニが近づくにつれて、もし頼まれなければ彼らは傷つくだらうということに人々は気づいている。人々が頼まれ、そしてそれを断る人はめったにいないということは、ある人々にとっては、ある種の離反、さらには反教会主義を表明していても参加できるということでもある。自分から申し出るのは、多分、彼らにとっては難しいことだっただろう。信者ではない人々は、旗手より宗教色の薄い、警備係やあるいは土曜の夜の芝居にかかわることが多い。いろいろ困難はあっても、全体的にはよい雰囲気、昔よりよく組織されていて、参加者も多い印象が残る。こうして配備された組織の一部がその年一杯続くだけに、なおさら社会的絆が問題になる。他のファブリシアンや教区信者に助けられながら、Trépasséesのファブリシアンは、万聖節(11月1日)の後の最初の日曜日、喜捨を仰ぐと同時に、中に砂糖を少し入れたパン、Trépassésのパンbara an anaonを配るために、村中の全ての家々を例外なく回るのである。伝統的に、人々はそのパンを分け合い、十字を切り、食べることになっている。しかし、この巡回はとても陽気に行なわれることが多く、とりわけ、最も遠い村とも接触を保ちかつそれを確かなものにする、そしてまた新参者たちと会うよい機会なのである。この募金係たちが追い返されることはほとんどない。

このようなファブリシアンの苦労はLocronanに限らず、周辺の村のファブリシアンについても同様である。2001年にPlonévez-Porzayの教会のファブリシアンをつとめたSebastien Hénaff(1930年生)とJoseph Tretout(1935年生)は、7月第2日曜日の公式トロメニにはSebastien Hénaffが、第3日曜日にはJoseph Tretoutがそれぞれ責任者として十字架を持ってプロセシオンを行ない、Plonévez-Porzayの教会やシャペルのバニエールについてはその持ち手を各回40人ずつお願いしなければならぬとその苦労を語っていた。トロメニのための祭祀組織が存在しないため、家族や近所の人たちの手を借りながら、伝統的なコスチュームを用意し、プロセシオンできるように準備をしなければならないのである。日本の民俗における祭祀組織の調査に慣れてしまっている筆者たちにとって、この柔軟な組織運営の実態は形式的な調査の困難さをあらためて考えさせてくれるものであった。伝承を荷っているのは当然ながらそれぞれ意志と意欲をもつ個々人なのであった。

### (3) 現在のトロメニ

**6年に1度だけ現れる道** トロメニの道は聖なる道として認識されており、その道は6年に1度、7月第2日曜日から第3日曜日の間しか作られないのが特徴である。先のChristiane Vilainもいうように、麦畑の麦を刈り取って一筋の道をつけ、また小川が流れているところにはトロメニのために木の板を渡して橋をかける。樹木が生い茂った林の中にも6年前と同じように枝を刈り、木の根を除き、場所によっては人が1人通れるくらいの小さな道を作る。このトロメニの期間だけ聖なる道を作るのである。6年に1度のため、草や樹木が生い茂っており、7月の第2土曜日には道作りがあらこちらで行なわれる。そして7月第3日曜日に2度目のプロセシオンが終わると、翌月曜日にはまた川や林を元通りに戻すのである。これらの仕事は、組織的に行なわれるのではなく、父親が行なっていたから息子もそれにならうというように、家族の代々の役目として自発的に行なわれている。

**観光客には教えない** Locronanの観光案内所でも、トロメニの道は正確にはわからない。実際、

個人の所有地となっている麦畑やジャガイモ畑、あるいは牧草地に一筋の道をつけるのがプロセシオンの道であり、また木々に塞がれた林の中に一筋の道を作って、それがプロセシオンの道となる。そうして、トロメニの直前の土曜日から翌週の日曜日までしかそれがわからないからである。現在でも、親から子へとそれぞれの家族ではトロメニのために自分の家族が行なうべき仕事を引き継いできている。Jean-Yves Nicotは「ジャーナリストがトロメニの道の地図を下さいとやってきたことがあったが、断った。これはハイキングのための道ではなく、聖なる道である。それを汚される可能性があるから、たとえ本当の地図があっても教えない。トロメニの日に来ない限りわからない。」という。ジャーナリストや観光客の質問には、たとえ道を知っていても教えない、そうしてトロメニの聖なる道を守ろうとしている、というのである。

**Jeu de Saint Ronan聖ロナン**の劇 2001年7月第2日曜日と第3日曜日の2回の公式トロメニの前の土曜日の夜、2回にわたって、1953年にBernard de Paradesによって作られた「Jeu de Saint Ronan聖ロナンの劇」が上演された。教会のポーチを舞台にして、Locronanの有志の人たちによって演じられるスペクタクルで、聖人ロナンの伝説とトロメニの意味が教えられる。2001年7月7日（土）に行なわれたスペクタクルで演じられたのは、次のような内容であった。

ロナンは7世紀にアイルランドで生まれた。天使がロナンに「アイルランドを出てブルターニュに行きなさい」といった。ロナンはブルターニュに来て最初に、狼が食べようとしていた羊を助けて、羊の持ち主に返した。それがケバンという女性の夫であった。ケバンの夫はロナンと友達になった。ケバンはそれを面白く思わなかった。ケバンは「ロナンは私の娘を盗んだ」と嘘をついた。グラドラン王は兵士たちに「ロナンを探せ」といった。王様はロナンが悪いと考えて、罰として犬たちを放った。ところが犬たちはロナンの前に出ると伏せた。そして、ケバンの娘を探し出したら彼女は死んでいた。しかし、ロナンはそれを生き返らせた。

ロナンは、Saint-Brieucに近いイリヨンHillionというところに行って死んだ。遺骸を牛車に乗せて牛に自由に引かせたところ、ブルターニュに帰ってきた。ケバンはTrou-Balaoと呼ばれるStiffの谷で洗濯をしていたが、その牛車を見ると槌でその牛車をおどし、猛烈な一撃で1頭の牛の角を折った。牛がさらに山を登り続けると、山頂で牛の角が落ちた。そこはPlas ar c'hornと呼ばれる場所となった。その後、尾根を下ったところで大地が裂けてケバンはその中に吸い込まれた。その場所に、カルヴェールがあるが、人々はその前を通るときだけは昔から絶対にひざまずいてお祈りをすることはしない。

ロナンの話はどんどん皆が知っていった。そしてロナンを聖人として崇拝するようになった。王様たちが、Locronanに教会を作るための資金を出すようになった。Jean V, Henri II, François II, Anne王女らがシャペルを立てる資金を出した。シャペルにはロナンの遺体reliquesがある。ブルターニュの人々はそれぞれの信仰によってロナンのイメージを作った。Locronanで糸を織る仕事をする人はロナンをサン・パトロン守護聖人として選んだ。ロナンがクモを見て糸の仕事を教えたのでそうになったという。グラン・トロメニは聖人ロナンが歩いた道を歩くが、これには聖人の後につづくという意味がある。そして、いつの時代でも信仰によってトロメニをした人にはご利益があったという。

そして、トロメニの道作りについては、次のような説明がなされた。土をならしてトロメニの道



7月第2日曜日の前日の土曜日に翌日からのプロセシオンのために新たに整備された山登りの道。



同じく7月第2日曜日の前日の土曜日にプロセシオンのために刈り取られ麦畑の中の道。



第5スタシオンの場所に設けられる19番目のNotre-Dame-de-Bonne-Nouvelleのヒュッテをフアリジャンとその友人の有志が材料を持ち寄り、前日の土曜日に作成し始めたところ。



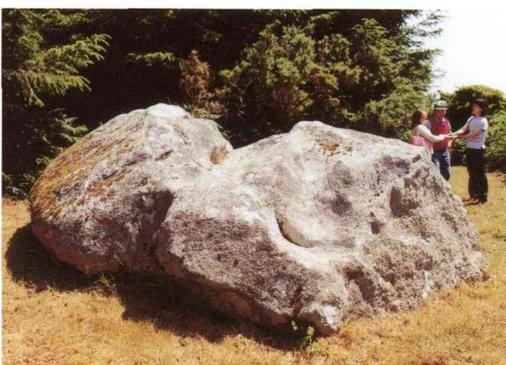
第5スタシオンのカルヴェール。山上のSaint Ronanの第10スタシオンからちょうど対角線上にある。青と黄色の三角旗がスタシオンであることを示している。



同じく土曜日に20番目のSaint Laurentのヒュッテを作成しているGeorges Bernardさんとその友人。



第6スタシオンのカルヴェールと22番目のSaint Miliauのヒュッテの準備風景。



Kazeg vaen石の牝馬。



ロクロナンの市街地でのヒュッテの準備風景。

を開く、畑の麦を刈り、木を切ってトロメニの道を開く。こうしてトロメニの道を開くのは、「神様の道を開く」ことである。神様の道というのは、神様への道という意味と、神様が進む道という意味との両方があるという。このスペクタクルの後、上演に参加した人たちを中心に、教会周辺の家々の間の小道を一廻りしてきて、トロメニの開始を知らせるための火が宵闇の広場で焚かれた。

**Accueil des bannières**バニエールのキス 2001年7月8日(日)10:30からの盛儀ミサに先立ち、教会の前の広場で、10:15にAccueil des bannièresバニエールのあいさつという行進が行なわれた。Locronanの十字架とバニエールがペニティから出て、教会前の広場を一周しながらKerlaz, Plonévez-Porzay, Quéménéven, Plogonnecの4つの地区communesから集合した十字架とバニエールの先をコツンコツンと合わせて、いわゆるバニエールのキスをする。このキスをした村は次々とLocronanの後に続き、教会とペニティの建物を一周して教会へ入る。12:00にミサが終わると、昼食の時間となり、その後14:00に広場に集合してトロメニのプロセションが始まる。Locronanの十字架と聖ロナンの聖遺骨reliquesを安置した輿、聖ロナンの鐘、バニエール、そして神父たち、4つの地区の十字架やバニエール、他の町や村からの参加者、巡礼者など長い行列を作ってプロセションする。聖ロナンの鐘は非常に古い真鍮製で、小尖塔の形をした聖遺物箱で運ばれる。伝説によれば、この鐘は聖ロナンがアイルランドから持ってきたもので、この鐘の音で祈りの時に信者たちを呼び集めていたという。

**トロメニの出発** 聖ロナンの聖歌の歌声にのって、広場からLannの小道に入り、第1スタションまで進む間に、①Saint Christoph, ②Saint Roch, ③Saint Mathurin, ④Notre-Dame-du-Rosaire, ⑤Saint Joseph, ⑥Sainte Marguerite, ⑦Saint Herbot, ⑧Saint Sébastien, の合計8つのヒュッテの前を通る。これらの聖人像はすべてLocronanの教会に保管されているものであり、それぞれの聖人の世話をする者が決まっている。前日にヒュッテを作り、トロメニ当日は伝統衣装を着て、鐘を手に、ヒュッテの前を通る人々に献金を呼びかける。

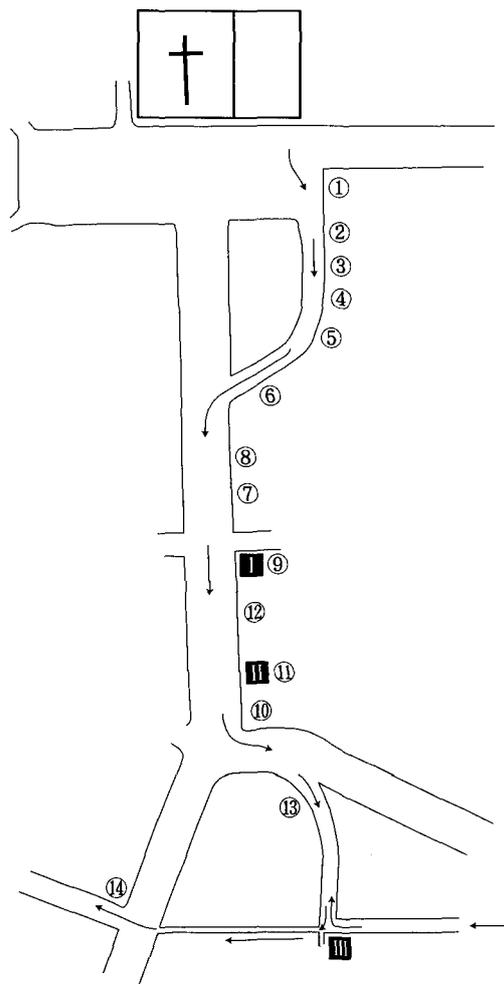
**順路とスタションstationsとヒュッテhuttes** ①Saint Christopheは旅人を守る聖人で、このヒュッテの世話をしているYvonne Brepivet(1923年生)は、トロメニのたびに自分の店の前にhutteを立てて、聖人の守りをしている。友達もボランティアで手伝ってくれる。Yvonne Brepivetは「自分や家族が旅行をして事故など悪いことがないのは、この聖人のおかげだと思っている」という。②Saint Rochはペストの治癒聖人で、Le Hénaff(Herve)の1家族がトロメニの間、世話をしている。③Saint Mathurinは鬱病の治癒聖人で、昔はファブリシアンFabricien des Trépassésが世話をしていたが、今はミサによく出る人のうち、4人の年配の女性が世話をしている。④Notre-Dame-du-Rosaireは、ファブリシアンFablicien des Rosaireが世話をしていたが、今はLe Keo(Queau)とその家族が手伝いながら世話をしている。⑤Saint Josephは、木工職人の守護神で、Guillouの家族が代々世話をしていたが、前回のトロメニからLidourenの家族も手伝うようになった。⑥Sainte Margueriteは、出産する女性の守護神で、代々Hémonの家族が世話をしている。今も若い女性たちが多く献金し、この聖人の加護を願っている。⑦Saint Herbotは、角をもつ家畜の守護神で、代々Chiponの家族が世話をし、友達が手伝っている。⑧Saint Sébastienは、ペストなど伝染病患者の守護神で、Coqdouの家族が20年前から世話をしている。それまでは、Famille ThomasとFamille Tanguyの2家族だったが、彼らが転居したり高齢になったので、代わった。

そして、第1スタシオンにある⑨Saint Eutropeは、病人と病院の守護神で、Locronanには彼の名を冠した病院が、1430年にすでに存在しており、そこには彼の聖遺骨が崇められていたという。かつては、それらの聖遺骨を収めた銀の聖遺物箱が、シャペルNotre-Dame de Bonne Nouvelleの近くにある聖エウトロプの泉水につけられた後、この第1スタシオンで巡礼者たちに披露され、この聖人の守り役のファブリシヤンが、トロメニの御利益を保証してくれるこの泉水の水を一杯飲むように勧めていたという<sup>(19)</sup>。昔は木工職人たちがヒュッテを作ったが、今は彼らがロクロナンに住んでいないので、2001年の場合はRoyerの家族がヒュッテを作った。そしてRonan Thiébaudの家族を加えて、7人が2時間交代で小屋で聖像の守りをしていた。

第1スタシオンから第2スタシオンまでの距離は短いため、その間にあるのは⑩Sainte Antoineのヒュッテだけである。Sainte Antoineは、豚を飼う人を守る聖人で、Hascoëtの家族とPennaneachの家族との2家族で世話をする。Hascoëtの家族は現在LocronanからQuimperに転居している。またパリに住んでいた時期もあったが、トロメニには必ず帰ってきていたという。今も「家族の伝統」として、子供たちも交代で小屋に来させるようにしているという。

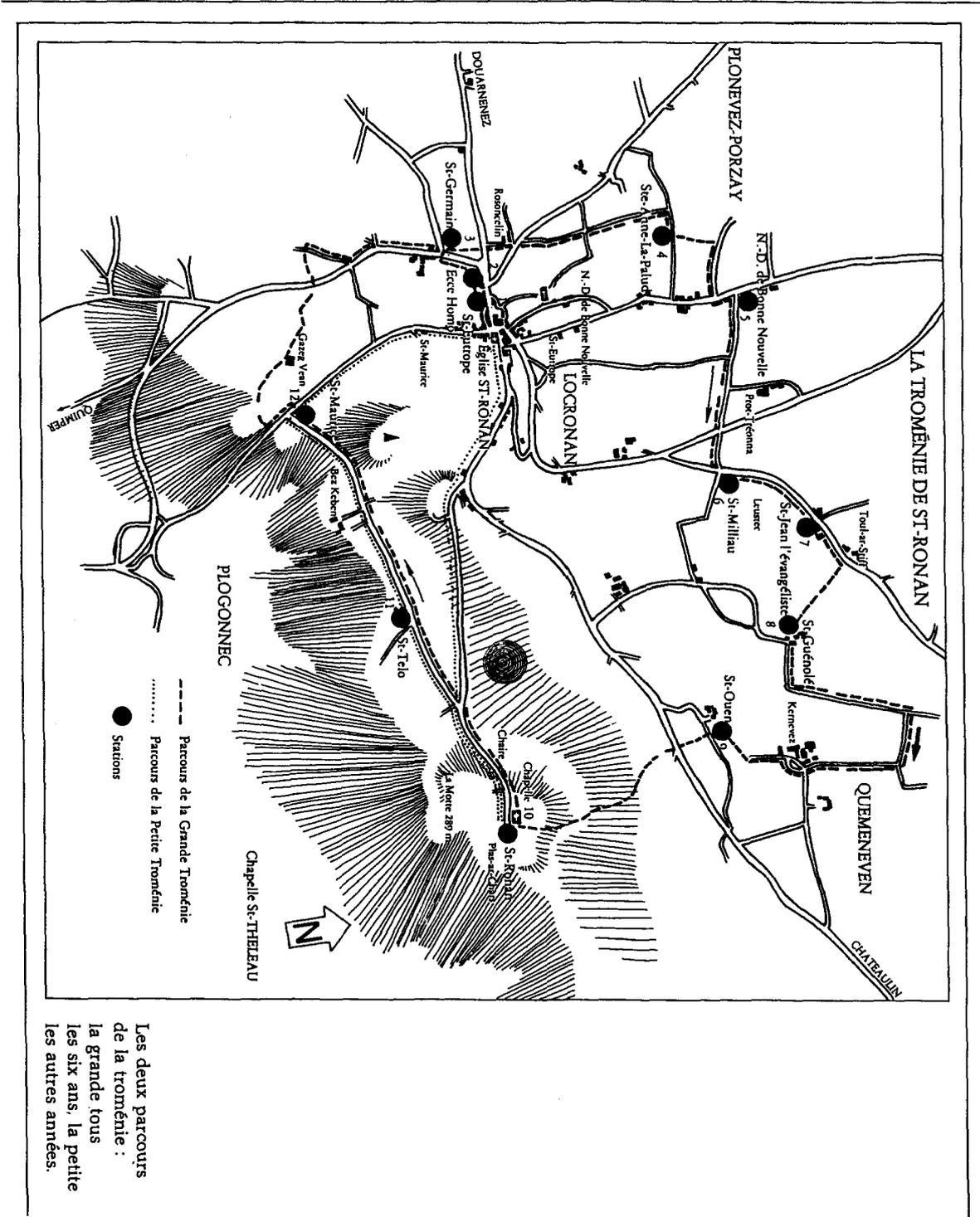
第2スタシオンのカルヴェールの足元に、⑪Ecce Homoの古い檜の木像を安置したヒュッテが設置される。両手を前で縛られた、苦しみのキリスト像である。Ecce Homoは‘Christ attendant le Supplice’（刑罰を待つキリスト）ともいわれる。審判の途中のイエス・キリストのことである。ピラトが民衆に茨の冠をかぶせたキリストを紹介したとき、‘Voici l’Homme’（「あなたは人間です」、つまり「この人を見よ」）といったという、その至高のキリスト審判像である。このヒュッテは代々Louboutinの家族が1家族で世話をしている。それから、⑫Notre-Dame-de-Lourdes、⑬Saint Corentinの2つのヒュッテを経て、第3スタシオンのカルヴェールの場所を直角に北方向に向きを変える。

この間にある、⑫Notre-Dame-de-Lourdesは、ルルドの奇跡の洞窟に示現した聖母マリアで、聖像はKerlazの教会から持ってくる。その聖像はもとKergoatの教会にあったが、神父が壊してしまっ



教会の前の街路におけるプロセシオンの進路とスタシオンとヒュッテ (2001年の実際)





Les deux parcours  
 de la troménie :  
 la grande tous  
 les six ans, la petite  
 les autres années.

Donatien Laurent "La troménie de Locronan : Actualité d'un pèlerinage millénaire" 1987より

たため、3回前、18年前のトロメニから、KerlazのN.D.の聖像を借りて来ている。小屋を作るのはLocronanのCosmaoの家族が代々これを行っていた。しかし、めんどろがって世話をしなくなったので、3回前、18年前から、代わってHascouerの家族が世話をしている。⑬Saint Corentinは、Quimperの初代司教でCornouaille地方の守護聖人である。Joncourの家族とQuiniouの家族が世話をしている。この2家族は昔はロクロナンに住んでいたが、Plornévez-Porzayに引っ越した。それでもトロメニの時は手伝いにくる。この2つの家族が、5、6人で世話をしている。

この第3スタシオンから、北に向かって方向を変え、ふだん使っていない土手の間を切り開いて作った小道、通称Lannの小道を数十mプロセションしていくと、⑭Saints Germain et Evenのヒュッテに至る。このSaint Germainは、Kerlaz地区の守護聖人で、Saint EvenはKerlazの貴族だったといわれ、お祈りをすれば頭痛やリューマチに効くという。Kerlazのヒュッテは、3回前、18年前までは第3スタシオンのカルヴェールにもっと近い場所にヒュッテを作っていたが、その後、現在の場所に1つのヒュッテにして統合した。現在のヒュッテの準備や世話は教会のミサによく来る人たち約15人が2人ずつ交代で1週間の間、行っている。そこから、さらに数十メートル北へ進むと道路の交差する場所にPlonévez-Porzayのシャベルに安置されている守護聖女⑮Notre-Dame de la Clartéと、⑯Sainte Thérèse、⑰Saint Yvesのヒュッテが三基ほど設けられている。Notre-Dame-de-la-Clartéは、chapelle de la Clartéのcomité10~15人が世話をしている。Sainte Thérèseは伝道の守護聖人、またはフランスの守護聖人といわれ、ロクロナンの家族が世話をしている。Saint Yvesは、貧しい人々の弁護士といわれる聖人である。Guegenという1家族が代々世話をしている。

**Sainte Anneと Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleのヒュッテhutttes** その場所を通過して森の茂みを通り抜けて約1kmばかり進むと、道は直角に東の方向へと曲がる。するとまもなく、第4スタシオンの高さ約1mの古い石のクロワcroixがみえる。その手前に、⑱Sainte-Anneのヒュッテが作られている。これはSainte-Anne-la-Paludのシャベルから持ってこられた聖像で、Sainte Anneは、ブルターニュの守護聖人といわれ、Sainte-Anne-la-Paludのシャベルのファブリシアンがそのヒュッテの世話をしている。この第4スタシオンの地点は、1930年以前はLocronanとPlonévez-Porzayとの境界であったため、現在でもトロメニにおいては変更される以前の境界線が尊重されているのだという。ここから次の、第5スタシオンのカルヴェールと⑲Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleのシャベルから出される聖像のヒュッテまでは、沼地を横切ることになる。トロメニでは、人々はここで立ち止まってお祈りを捧げる。Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleのシャベルのファブリシアンは「スタシオンはカルヴェールではなく、このヒュッテのことである」といっている。ここは第4スタシオンと同じように1930年以前はLocronanとPlonévez-Porzayとの境界地点であった。この低地のNotre-Dame-de-Bonne-Nouvelleの第5スタシオンの位置は、ちょうど山上の高地の第10スタシオンのSaint Ronanのシャベルの位置と対角線上にあり、かつ、その対角線の後方の延長線上にはドゥワルヌネ湾に面した華麗なパルドン祭り知られるSainte-Anne-la-Paludのシャベルが立地している。山上の高地の、かつて巨石のあったSaint Ronanの第10スタシオンから見下ろせば、Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleの第5スタシオンをはるかに望むことができ、かつその延長線上に白波の寄せるドゥワルヌネ湾の岸壁近くにSainte-Anne-la-Paludのシャベルが屹立しているのである。この高地と低地、乾燥地と湿潤地、巨石と海浜、男性と女性などの



トロメニの開始に先立つ教会前広場でのバニエールのキス。



Penityから担ぎ出されたSaint Ronanの聖遺骨reliques。



教会前の大通りを進むプロセション。



女性たちの信仰を集めている6番目のSainte Margueriteのヒュッテ。



小道を進むSaint Ronanの聖遺骨reliques。



子供たちも伝統衣装でプロセションに参加する。



日常の服装でヒュッテに立つ親子。



伝統衣装を身につけてヒュッテに立つ姉妹。



第4スタシオンと第5スタシオンの間の順路の中で最も低湿地の小川を渡るプロセシオン。



第6スタシオンのカルヴェールと22番目のSaint Miliouのヒュッテ。



とうもろこし畑と牧草地の中を進む長い列のプロセシオン。



刈り取った麦畑の中を進むプロセシオン。



山への登り口にある29番目のNotre-Dame-de-Pitiéのスタシオン。



同じ場所を一年後に訪れたときの光景。



山上のSaint Ronanの第10スタシオンでの司祭たちによる祭式。



第10スタシオンでの一休みに立て並べられた多数のバニエール。



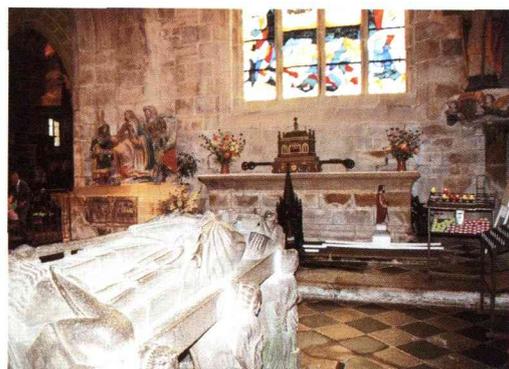
Kazeg vaen石の牝馬に腰掛ける女性とそれを写真に撮ったり笑いかける人たち。



Kazeg vaen石の牝馬にキスをする女性を撮った古い写真。



Kazeg vaen石の牝馬に腰掛ける二人の女性。



Saint Ronanの墓廟Penityの内部。



1905年当時のロクロナン  
(Alain Tanguy氏提供)



1905年撮影のロクロナンのトロメニ  
(Alain Tanguy氏提供)



1905年当時のトロメニの山登り  
(Alain Tanguy氏提供)

番号	聖人名	所属 commune	世話人	保管先
1	Saint Christophe	A	◎(1人)	A
2	Saint Roch	A	◎(1人)	A
3	Saint Mathurin	A	△(有志)	A
4	N.D. du Rosaire	A	△(有志)	A
5	Saint Joseph	A	◎(2人)	A
6	Sainte Marguerite	A	◎(1人)	A
7	Saint Herbot	A	◎(1人)	A
8	Saint Sébastien	A	◎(1人)	A
I-9	Saint Eutrope	A	◎(2人)	A
10	Saint Antoine	A	◎(2人)	A
II-11	Ecce Homo	A	◎(1人)	A
12	N.D. de Lourdes	A	◎(1人)	Chapelle de Kergoat
13	Saint Corentin	A	◎(2人)	A
III-14	Saints Germain et Even	B	有志	B
15	N.D. de la Clarté	C	△	Chapelle de Notre-Dame-de-la-Clarté
16	Sainte Thérèse	A	◎	A
17	Saint Yves	A	◎(1人)	A
IV-18	Sainte Anne	C	△	Chapelle de Sainte-Anne-la-Palud
V-19	N.D. de Bonne Nouvelle	A	△	Chapelle de Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelle
20	Saint Laurent	C	有志	C
21	Sainte Barbe	A	◎(2人)	A
VI-22	Saint Milliau-Saint Michel	C	△(2人)	C
VII-23	Saint Jean	A	◎	Chapelle de Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelle
24	Saint Mathurin	D	◎(3人)	Chapelle de Kergoat
VIII-25	Saint Guenolé	D	◎(2人)	Chapelle de Kergoat
26	N.D. de Kergoat	D	◎(1人)	Chapelle de Kergoat
27	Sainte Barbe	D	◎	Chapelle de Kergoat
IX-28	Saint Ouen	D	□(15人)	D
29	N.D. de Pitié	A	◎(2人)	A
30	N.D. de Bon Secours	A	◎(2人)	Chapelle de Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelle
X-31	Saint Ronan-Plas ar c'horn	A	□(3人)	A
32	N.D. des Portes	E	有志(12人)	Chapelle de Saint Albain
XI-33	Saint Théleau	E	◎+□	Chapelle de Saint Théleau
34	Saint Thurien	E	有志(約20人)	E
XII-欠	Saint Maurice			
35	N.D. de Treguron	E	□(20軒)	Chapelle de Sezuec
36	N.D. de Lorette	E	□(40人)	Chapelle de Lorette
37	Saint Thégonnec	E	□(10人)	Chapelle de Saint Thégonnec
38	Saint Pierre	E	□(20人)	Chapelle de Saint Pierre

番号	所属commune	世話人	保管先
I～XII : station	A : Locronan	◎ : famille	A : église de Locronan
1～38 : hutte	B : Kerlaz	△ : fabricien	B : église de Kerlaz
	C : Plonévez-Porzay	□ : association	C : église de Plonévez-Porzay
	D : Quéménéven		D : église de Quéménéven
	E : Plogonnec		E : église de Plogonnec

(関沢まゆみ氏作成)

好対照に象徴的な意味を考えたくなる衝動は、印象の誘惑としてここではじっと抑えておかねばなるまい。

Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleでのお祈りが終わると、プロセシオンは直角に東へと向きを変え、とうもろこし畑の間の道を進み、Plonévez-Porzayの教会に安置されている守護聖人②Saint Laurentのヒュッテの前を通り、さらに、プラ・トリアナPrat-Tréannaと呼ばれる長い栗並木を通過して、Locronanに住むある農家が代々所有していた②Sainte Barbeのヒュッテを通り過ぎ、第6スタシオンのカルヴェールの下に設置されたPlonévez-Porzayの守護聖人②Saint Miliiauのヒュッテに達する。Saint Laurentは、1999年以来、筆者たちがこの地を訪れるたびに彼の家でトロメニやパルドン祭りに関するいろいろな民俗の情報を語ってもらっているGeorges BernardらPlonévez-Porzayの有志によって世話されている。また、Sainte Barbeは、火事の時、消防士を守る聖人、馬の蹄鉄を作る人や鉱山で働く人、石切の人などを守る聖人といわれている。このSainte Barbeの聖像は、かつてある農家に属していて、その農家を買った人がトロメニに際しては小屋を作って聖像を出している。現在の所有者はLe GarsというLocronan内のLe Menecに居住する農家であるが、彼が1953年に土地を購入したときに聖像も付いていたという。昔は前の土地所有者の家の中に保管していたが、1930年代にLocronanの教会に保管するようになった。土地と家の売買の時、契約書に必ず聖像のこともっている。Le Garsはすでに高齢で、子供もないので、やがて家と土地と聖像を一緒に売られるが、トロメニの時にこのヒュッテを作り聖人の世話をするのはLigavanの家族が18年前から手伝うようになっている。

**大きく廻る順路** 第6スタシオンを示すカルヴェールの足元に作られた②Saint Miliiauのヒュッテには、Saint Michelのバニエールが共に立てられている。Saint MiliiauはPlonévez-Porzayの中心的な聖人といわれている。Plonévez-Porzayの教会のファブリシアン2人が世話をしている。2001年はSebastien Hénaff（1930年生）とJoseph Tretout（1935年生）の2人であった。この第6スタシオンの近くに住むMarie Thérèseによれば、このスタシオンの場所は、croz-ruz（血の十字）ともいわれているという。この辺りは革命の時代に多くの戦いがあった。このカルヴェールは約40年前に、彼女の父親のJean Douerin（1904-88）がトロメニのために立てたものだという。その父親は石工であった。プロセシオンは、ここで再び直角に北方に曲がり、数百メートル先のLeustecに位置する第7スタシオンのカルヴェールに達する。このカルヴェールには1604年の銘がみられる。このカルヴェールのそばには③Saint Jeanのヒュッテがある。Saint Jeanのヒュッテは、その近くに住むBernardの家族とFerecの家族の2家族が世話をしている。聖像はふだんはChapelle-de Bonne-Nouvelleに保管されている。Quimperカンペールに住む若い家族もトロメニには帰ってきて少年たちは伝統衣装を身につけて自分の家族の伝統行事に参加している。

ここからプロセシオンは北に向かい、Stiffの小川に渡された何枚かの板の上を通過して小川を越え、それから右、つまり東南方向に曲がると、畑の入口に④Saint Mathurinのヒュッテがある。Saint Mathurinの聖像は、ふだんはQuéménévenのchapelle de Kergoatに保管されている。近隣の3家族でこのヒュッテを作る役割をまわしているため、1家族は18年に1回の割合で世話役にあたる。2001年はGrau-HascoëtとMarie Louise-Hascoëtの夫婦が担当していた。Saint Mathurinは死んだ人を守る聖人で、煉獄にいる人を守る、また、鬱病を治す聖人だという。

そこを過ぎて、畑の中の道を通り、Trobaloの農場が見える所に着く。その場所の古い石のクロワが第8スタシオンで、それに隣接して㉕Saint Guenoleのヒュッテが作られている。このSaint Guenoleにはとくにご利益はないというが、ヒュッテは昔から、この地のJean-Yves Garrecの家族とCariouの家族との2家族が作ることにしている。Jean-Yves Garrecの家族は先代まで農家だったので、家のうしろの畑や家の敷地内をプロセシオンする人々が自由に通っていたが、そのうしろの畑を売った時にそこを通らないようにした。そのため、ルートが少し大回りするようになったという。昔は家のそばを通る人々に水やシードルを出したが、今はヒュッテの世話を行なうだけで飲み物の提供はしていない。

このTrobaloの第8スタシオンから、プロセシオンは谷に沿ってKernévezと次のスタシオンが置かれている山の麓のBourlanの村へとは直接行かずに、いったんQuéménévenの領域内に入って行く。そこには、㉖Notre-Dame-de-Kergoatと㉗Sainte Barbeのヒュッテがある。Notre-Dame-de-Kergoatは、ふだんはKergoatのシャベルに保管されている聖母マリア像である。これについては代々、Nezet Joseeの家族が1家族だけでヒュッテを作り、世話をすることになっている。また、トロメニの日には今でも自宅を開放して水やジュースをふるまっている。昔はシードルを出していたという。Sainte Barbeは、雷や急死から人々を守ってくれる聖人で、ふだんKergoatのシャベルに保管されている。ヒュッテを作るのはその近隣の家、3家族が担当している。トロメニのルートにSainte Barbeが㉘とこの㉗と2つのヒュッテの2ヶ所あるので、もとは同じ家族だったのかなど思っていると彼らはという。

第9スタシオンには、古い花崗岩でできたクロワcroixの向かい側に㉘Saint Ouenのヒュッテが作られる。Saint Ouenの聖像はふだんはQuéménévenの教会に保管されており、Chapelle de Saint Ouenのアソシアシオンassociation約15人が当番で世話をしている。Saint OuenはQuéménévenの守護聖人といわれ、昔はその聖遺骨reliquesがこのヒュッテの近くで展示され、巡礼者達の崇敬を集めていたという。彼らは、石の十字架の周りを回った後、次々と聖遺骨reliquesに接吻したという。

**山登りの道** この後、麦畑の中を刈り取った道を南へ向って約150m進むと、山の麓に㉙Notre-Dame-de-Pitiéの聖像を安置したヒュッテがある。Notre-Dame-de-Pitie 嘆きの聖母像は、Garecの家族とLe Bretonの家族の2家族が代々世話をしている。昔は、ここで、1人の司祭がルカSaint Lucによる至福の福音を高らかに読み上げると、全員が跪いて、Misère ミゼレ「憐れみ給え」、つまり詩篇50の冒頭句、ミゼレを歌詞とする楽曲を唱和し、次に、聖なる山に登る前の巡礼者たちのロナンへの熱烈な祈願である、Parce Domineが続いた<sup>(20)</sup>という。そして、太鼓の轟きに鼓舞され、巡礼者たちは山の急勾配を登って行く。山の中腹で、斜面を背にした小さな枝組みの小屋の中に㉚Notre-Dame-de-Bon-Secours救いの聖母像のヒュッテがある。この聖像はふだんchapelle de Notre-Dame-de-Bonne-Nouvelleに保管されているもので、Claude Briand Corentinの家族とClaude Le Hénaffの家族の2家族が代々世話をしている。

**Saint Ronanの第10スタシオン** そして山頂に着くと第10スタシオンの㉛Saint Ronanのシャベルがある。人々はシャベルを時計回りに一周してから中に入る。たくさんのバニエールbannièresが並べて立てられてその光景は見事である。

ここではAssociation de Saint Ronanの3人、2001年の場合は、Ronan Hénaff, Louis Goadou,

Joseph Louboutinの3人がロナンの聖像の世話を行なった。トロメニの参加者が全員山を登り終え、約30分程度の休憩をとる。地元ロクロナンの人たちのボランティアで仮設トイレも設けられ、軽い飲み物の売店も出される。この休憩の後、神父たちによる祭式があり定められた福音と聖歌が読み上げられ、誓約が述べられる。そうして山頂での儀礼が終わると、隊列を作り直し、今度は西方へ斜めに進み、Plogonnecとの境界となっている尾根伝いの道を下りて行く。

**Plogonnecからのヒュッテhutttes** そこにはPlogonnecのシャペルに安置されている、㉔Notre-Dame des Portesのヒュッテと、山の中腹に第11スタシオンの古いカルヴェールと㉕Saint Théleauのヒュッテがあり、さらに下りると㉖Saint Thurienのヒュッテがある。Notre-Dame-des-Portesは、Plogonnec内のchapelle de Saint Albainに保管されている聖像である。このシャペルは約15年位前からファブリシエンがいなくなり、またassociationもなく、1週間に1度あげられていたミサも行なわれなくなっているため、シャペルの近くに住む12人のグループがこのトロメニでは世話をしている。Saint Théleauの聖像は、Plogonnecのchapelle de Saint Théleauの近くに住むTymenの家族のもとに保管されており、この家は18世紀からトロメニにおけるヒュッテの世話をしているという。その後、Carriouの家族が手伝うようになり、約12年前からシャペルのassociationが両家を手伝うようになった。現在、合計11家族が交代で世話をしている。Saint Thurienの聖像はPlogonnecの教会に保管されており、これはPlogonnecの守護聖人といわれている。町の約20人の有志が3人くらいずつ交代で世話をする。

それから、第12スタシオンへ下る途中に、ケバンを呑み込んだと伝えられる、Bez Kebenベズ・ケバン（ケバンの墓）の場所を通る。そこには古い石のクロワcroixが立てられているが、先にも述べたようにここで十字を切る者はひとりもない。

最後の第12スタシオンにはカルヴェールがあり、通常はSaint Mauriceのヒュッテが設置されるのであるが、2001年には出されていなかった。プロセシオンはそのT字路を左に曲がって、ローマ時代からの道といわれる道を南に下る。そのPlogonnecとの境界でもある道沿いには、㉗Notre-Dame-de-Treguron、㉘Notre-Dame-de-Lorette、㉙Saint Thégonnec、の3つのヒュッテが並んでいる。Notre-Dame-de-Treguronは、Plogonnec内のchapelle de Seznezの責任者であるプレジドンのSeznezの家族のもとに保管されている。トロメニにはシャペルのassociationを構成している20家族が交代で世話をしている。Notre-Dame-de-Loretteは、Plogonnec内のchapelle de la Loretteに保管されている聖像で、トロメニにはシャペルのassociation 40人が交代で世話をしている。2001年の場合、責任者であるプレジドンはJean MouennerとSuzanne Gourmelinであった。ヒュッテの責任者は、Denise Lekeoという女性であった。このNotre-Dame-de-Loretteは家族を守る聖人といわれている。Saint Thégonnecは、Plogonnec内のchapelle de Saint Thégonnecに保管されている聖像で、トロメニにはシャペルのassociation 10人が交代で世話をしている。

**Kazeg vaen石の牝馬** それから、プロセシオンは道路を外れて西に向かい、牧草地と麦畑の中に6年ごとに作られる道を進む。この牧草地の所有者はCogmao、麦畑の所有者はLegrandで、前日の土曜日に麦畑の麦を刈り取って道を作る作業はPlogonnecの7人の有志が行なうが、もちろん所有者がそれに不満をいうことはない。そして、山林の木立の中に入るとまもなく、Kazeg vaen石の牝馬、またの名をKador sant Ronan聖ロナンの椅子あるいはBag san Ronan聖ロナンの

船、と呼ばれる巨石の場所に至る。前述のように、この巨石には子授けの力があると信じられており、いまでも本気か遊びかはそれぞれだが、何人かの女性が腰掛ける。クロワcroixやバニエールbannières、聖遺骨reliques、そして神父たちは、この巨石の前では立ち止まることなく、ただ側を通り過ぎて行くだけである。そして、高い土手に挟まれたえぐれた道に入る。そして丘の斜面を何百メートルか歩いた後、行列は再び西方に斜めに進み、Quimperへの街道を横切るが、その街道の四つ辻に、最後のヒュッテが建っている。Plogonnecの⊗Saint Pierreのヒュッテである。Saint Pierreの聖像はプレジドンと呼ばれるシャペルの責任者であるLe Flochの家族のもとに保管されている。Chapelle de Saint PierreがあるSaint Pierre地区にはassociationがあり、そのメンバーである20人が交代でヒュッテの世話をしている。このシャペルの中には泉水があり、その水は眼と耳に効くといい、ヒュッテにその泉水を容器に入れて持ってきて、人々に飲ませている。

**Plogonnecのシャペルとassociation** Plogonnecの場合、教会が1つとそれぞれの聖人に奉獻されたシャペルがあり、トロメニにおけるヒュッテの設営と聖人像の世話は、Saint Thurienについては教会の責任者、2001年の場合Thérèse Douargであったが、彼女と20人の教会から運ばれる有志が行ない、他のNotre-Dame-des-Portes, Saint Thèleau, Notre-Dame-de-Treguron, Notre-Dame-de-Lorette, Saint Thégonnec, Saint Pierreの6つについては、それぞれのシャペルのassociationが世話をするかたちとなっている。もともとPlogonnecの聖人は10体確認されているが、2001年は7体だけが参加した。Saint Philibert, Saint Tugen, Notre-Dame-du-Rosaireの3体はもうヒュッテを作るのを止めたという。この3聖人をまつるシャペルが昔はあったが、現在ではなくなっているためである。このようにPlogonnecの聖人のヒュッテをそれぞれの地区quartierのassociationが中心となって守っているという方式は、Locronanの聖人のヒュッテが代々決められている家族familleによって守られている方式とは対照的である。

**教会への帰還** 畑のなかの昔からの小道を進んだプロセシオンは再びQuimperへの街道に出ると、街道沿いの順路を辿りながら、Locronanに向かって最後の1kmを歩いて行く。そして、vêpres晩課の歌声にのって、人々は教会の広場に戻る。プロセシオンは広場を1周し、大ポーチの前を通り、担い手たちが腕を伸ばして持ち上げているロナンの聖遺骨reliquesの輿の下をくぐって、ペニティpenityの敷居をまたいで中に入る。かつては、あらためて広場の井戸の周りも1周していた。この時、時間は出発の午後14:00から約6時間がたち、夜の20:00を過ぎている。しかし、夏の日はまだ明るい。かつては、ロナンのペニティ墓廟の所で、出発の時と同じ儀式、つまり、周りを廻る、横臥像と聖遺物に接吻する、聖像の乗っている台の下をくぐるという儀式を繰り返していた。その後、教会の大祭壇で、司祭が聖体祝福式を行ない、次いで参加者、巡礼者たちがロナンをたたえる歌を歌い、聖遺骨への接吻が行なわれて儀式が終わる。

この大規模なトロメニのプロセシオンは、7月第2日曜日と第3日曜日にまったく同様に行なわれるが、その間の1週間は昼夜を問わず、個人個人のトロメニが行なわれている。このトロメニの順路約12kmを、一人で思いを込めて歩く人、数人で歩く人、一度にすべての道のりではなく、少しずつつないで数日で全行程を歩く人など、6年に一度だけ現れる伝統の道を、さまざまな思いで歩く人々の姿がこの1週間は絶えないのである。

## ⑥……………トロメニの構成と特徴

現在、ブルターニュ地方に伝えられているトロメニは以上の三例である。民俗学的な分析視点からすれば、それぞれの地域社会でこの伝統行事を荷っている現在の人たちにとって、また同時に外部からの参加者たちにとって、それぞれ現実的かつ現在の意味づけの深みもあれば、一方、歴史的にさかのぼってこの伝統行事の基本的性格とその伝承過程における時代ごとの変遷の意味という深みもある。そこで、ここに得られた伝説と現在という二つのレベルでの情報をもとに、現段階におけるこのトロメニの構成と特徴について、1.聖人伝説、2.トロメニの由来、3.トロメニの日取り、4.トロメニの順路とスタシオン、5.トロメニにおける儀礼的要素、6.トロメニの参加者たち、という6つの側面について整理しておくならば、以下のとおりである。

### 聖人伝説 –ウエールズやアイルランドから–

まず、聖人伝説については、サン・テロSaint Théleau, サン・グエヌウSaint Gouesnou, サン・ロナンSaint Ronanの三聖人ともにイギリスやアイルランドからやってきたといい、サン・テロとサン・グエヌウはウエールズから、サン・ロナンはアイルランドからと言い伝えている。これは、紀元前1世紀にカエサルのローマ軍に追われてブルターニュからヒベルニア（アイルランド）やブリタニア（イギリス）へと逃れたケルト人たちが、5世紀以降こんどは逆にアングロ・サクソン人に追われてブルターニュへと移住した動きと呼応している。そして、彼らがそれぞれの地にエルミタージュ隠棲者修道院を設けたのがその町の由緒として語られ、地名はそれぞれ、ランドロウLandeleauはテロTheloのランlanつまり隠棲修道士テロの修道院という意味であり、Gouesnouグエヌウはそのままサン・グエヌウの名前、Locronanロクロナンは背後の山稜の名前Menez LokornのLokornとSaint RonanのRonanに由来するものと考えられる。いずれも、地名は聖人の名前に由来するものとなっている。

そして、LandeleauのSaint Théleau は人々を病気から守るとか生命を守る聖人としての信仰、また第2スタシオンの檜の木の火難除けの信仰、これはケルトの伝説やドルイドの聖樹信仰を反映しているものと考えられるが、一方また、Gouesnouの教会裏の泉水がリューマチや赤ん坊の肌に効くという信仰、また、LocronanのSaint Ronanが病気その他から人々の生命を守るという信仰のほか、Kazeg vaen石の牝馬には巨石に子授けの力があるという信仰、これもケルト文化もしくはそれ以前の先住の巨石文化の伝統を反映している可能性が大であるが、それら多様な民俗信仰croyances populairesと混在しながら、聖人も固有の伝説を伴いつつ現世利益の効験をもたらす存在として信仰されているのが実情である。

### トロメニの由来 –troménieとterritoire–

次に、トロメニの由来については、その語源について2つの解釈がある。1つは、Donatien Laurentの説くもので、ブルトン語のtro minihiからきた語であるとする説である。minihi修道院の囲い地をtro一巡する、という意味である。一方、民間伝承的な語源説では、tro meneで、山の一巡、を意味するものと言い伝えている。いずれもtro一巡の意味は共通しており、かつ、これが少なくともフランス語ではないことから、この伝統行事が古い歴史をもつことが推定される。

そして、注意されるのは、聖人による、tro一巡、がterritoire領域に通じる意味をもっているという点である。tro一巡は、仏語や英語のtour一周という原義に通じる語と考えられ、またtrip周遊にも通じると考えられるとすれば、聖人のtroménieには、その語源がtro minihiであっても、tro meneであっても、少なくとも聖人の修道院の囲い地の確保と承認という伝承がその基本にあるといっ  
てよい。troménieとterritoireとの語源的緊密性が浮かび上がってくるのである。<sup>(21)</sup>

そして、とくにロクロナンの6年周期のトロメニの場合には6年に一度だけ現れる順路などによってきわめて演出的であるが、いずれのトロメニの行進においても強く印象づけられるしかけとなっているのは、聖人の歩行による領域設定の再現という儀礼の意味である。つまり、儀礼による時空の両レベルにおける原初回帰の意味づけであり、トロメニの行進が聖人の行進による領域設定のその領域確認の再現とその繰り返しのデモンストレーションとなっているのである。その意味では、これまでの民族学や民俗学の儀礼研究が明らかにしてきた原初回帰とシステム変換の両者の意味論のうちとくに前者に相当する典型的な例とみることができる。<sup>(22)</sup>

また、その修道院の囲い地の確保をめぐる伝承には、一致して、ランドロウのカステル・ガル卿、グエヌウのコモール伯爵、ロクロナンのコルヌアイユ伯爵のように世俗の領主権力からの寄進贈与というかたちが伝えられている点と、それに関与してたとえばランドロウのサン・テロの妹、ロクロナンのケバンのように、性悪女が犬などを使って聖人の歩行の邪魔をするというモチーフ、そして同時に、ランドロウの赤鹿、ロクロナンの野生の牛のように、聖人の歩行を逆に助ける動物が存在するというモチーフが付随しているという点が特徴的である。性悪女の妨害や動物の援助には、キリスト教の聖人信仰における受難、苦行、贖罪という重要要素が組み込まれていると同時に、より自然的な動物崇拜にもつながる素朴な信仰要素も組み込まれているといっ

#### トロメニの日取り ー太陰暦とケルト暦ー

次に、トロメニの日取りについて注目される点は以下の通りである。まず、トロメニの日取りはそれぞれの聖人の祝日とはまったく別であるということである。それぞれの聖人の日は太陽暦における固定祭日で、サン・テロSaint-Théleauの祝日は2月9日、サン・グエヌウSaint Gouesnouの祝日は10月25日、サン・ロナンSaint-Ronanの祝日は6月1日であるが、これらはいずれもトロメニの日取りと関係ない。それに対して、トロメニの日取りを、教会暦のうちでも太陰暦を採用している復活祭に関連する移動祝祭日によっているのが、ランドロウとグエヌウの例である。復活祭は太陰暦によるもので、春分の日の後の最初の満月の次の日曜日に当たるため、年によって3月22日から4月25日までありうる。そして、その復活祭から39日目のアサンシオンAscensionキリスト昇天の日にトロメニを行なうのがグエヌウである。そして、復活祭から49日目のパントウコットゥPentecôte聖霊降臨の日にトロメニを行なうのがランドロウである。そして、これらは毎年行なわれている。

それに対して、ロクロナンのトロメニの日取りは、教会暦の二つの基準、つまり太陽暦とも太陰暦とも関係なく、6年ごとのグラン・トロメニGrande Troménieは7月第2日曜日から第3日曜日にかけて行なわれている。このロクロナンのトロメニの日取りと独特の四周のトロメニの順路、そして12箇所のスタシオンの意味については、これを古代ケルトの暦法と世界観の伝統を示すものであるというプレスト大学のDonatien Laurent教授の論文があるが、ケルトの暦法とその世界観に関

する十分な知識をもたない筆者にとっては、文献史料の独自の直接的な確保の上で、またその解説の上でまだ困難な状態にあり、それを十分に論評できる立場にない。ただ、ここで指摘できるのは、ランドロウもグエヌウもロクロナンも含めて、このトロメニの行なわれる日取りというのは、5月1日から7月21日までの期間に設定されており、それはまさにこの地方で太陽を迎える季節であり、冬季のきびしいブルターニュ地方にあっては、最も太陽の恩恵を感じる季節、しかも、ますます温暖な気候へと向かっている希望に満ちた季節である、という事実である。

#### トロメニの順路とスタシオン ―聖なる樹木・巨石・泉水―

トロメニの順路とスタシオンについては、すでに三例それぞれの記述にあたって提示しておいたが、それらを通じてスタシオンとは何か、またスタシオンではないが順路にあって信仰の対象となっているものとは何か、それは大別して次の4つのタイプであるといえよう。第1は、聖人の伝説的な遺跡であり、サン・テロが登った檜の木、サン・グエヌウやサン・ロナンが腰掛けた石の椅子、サン・ロナンの遺骸を乗せていた牛車の牛の角が落ちた場所などである。第2は、伝説的な泉水や巨石や巨木の類である。これは第1の類に近く、グエヌウのかつてスタシオンであった泉水やそれとは別の教会裏の泉水の例のように聖人の伝説が付随していることも多い。そして、泉水の信仰はキリスト教カトリックの教えと目立った対立はみられない。しかし、巨石に対しては否定的である。ロクロナンのKazeg vaen石の牝馬は、またの名をKador sant Ronan聖ロナンの椅子あるいはBag san Ronan聖ロナンの船、つまりロナンがアイルランドから乗ってきた船だといわれるように、元来古くからの巨石信仰の対象であったと考えられるものに聖人伝説が付加されたと考えられる例もみられる。しかし、キリスト教カトリックは基本的には伝統的な巨石信仰に対しては否定的であり、それらをスタシオンに指定しようとする姿勢はみられない。ロクロナンの最重要スタシオンであるサン・ロナンの第10スタシオンにあったと言いつた伝えられている聖石はすでに破壊されているし、また、ランドロウのトロメニが遠巻きにしている牧草地内のドルメンはSaint-ThéleauのテーブルとかSaint-Théleauの家と呼ばれているが、トロメニの順路からははずされている。司祭がこのドルメンへは行ってはいけないといったというのである。そのような状態の中で、ランドロウの檜の木がスタシオンとされているのは特別であろう。しかも、火災除けのcroyances populaires民俗信仰を伝えているのである。ローマの大プリニウス『博物誌』第16巻95の“宿り木”の<sup>(24)</sup>記事をみるまでもなく、檜の木はケルトの聖樹であり、ドルイド教の最も重視する神木である。それが、圧倒的なキリスト教カトリックの教化を経たであろう中で、このように明確に伝承されている例としてはまさに注目に値する。この木がサン・テロと赤鹿の伝説にとって不可分のものとなっているために、この木の聖性を否定しきれなかったものと推定される。

スタシオンの第3のタイプは、石製のカルヴェールが建てられている場所である。そして、その多くはコミュニーの境界の場所である。このカルヴェールへの信仰の背景に、たとえば、グエヌウの第10スタシオンのサン・メモールのカルヴェールがその礎石としているサン・グエヌウの石と呼ばれる巨石の存在などの諸事例を通して、ブルターニュ地方に顕著な路傍のクロワcroixへの信仰や、そこから推定される古代の巨石信仰の痕跡へ、境界不安と巨石信仰、などという空想は、ここでは控えるべきであろうか。スタシオンの第4のタイプはシャペルの跡地である。これはキリスト教カトリックの施設であり、教会的な性格の明確なスタシオンといえる。

---

### トロメニにおける儀礼的要素 —習合・融合ではなく混在・併存—

トロメニにおける儀礼的要素として指摘できるのは、そこにはキリスト教カトリックの祭式と多様で伝統的な *croyances populaires* 民俗信仰とが混在しているという事実である。まず、ペニティ *Penity* は聖人の墓廟であり、聖人の遺骨 *reliques* が一定の順路を行進 *procession* するというのが基本である。その行列では聖像 *statues*、十字架 *croixes*、バニエール *bannières* などが威儀を正して整列行進して人目を引くが、その中心はやはり聖人の遺骨 *reliques* である。つまり、聖人がすでに死んだ後もまだ人々に祝福を与えるべく行進しているのである。その意味では、聖人への追悼顕彰と祈念招福の儀礼に他ならない。しかし、それに付随するものとして伝統的で多様な民俗信仰がトロメニの行事のさまざまな場面でその姿を現している。教会の周りや聖石の周りなど、人々が三回まわる所作、聖遺骨 *reliques* の捧げられた輿の下をくぐって聖人の守護を願う所作などである。それらの基層にはキリスト教カトリックの教義を超えた人々の信仰的行為の普遍性を看取することができる。そして、重要な点は、キリスト教カトリシズムと民俗信仰とは決して、習合とか融合しているのではなく、あくまで黙認許容と混在併存の関係であるという事実である。神父たちは人々の民俗信仰を黙認許容しているだけであって、自らは決してそれを教会活動に導入などしてはいない。人々もキリスト教カトリックの熱心な信仰者でありながら、民俗信仰を捨てることなく信仰しているのである。それは、カトリックによる *croyances populaires* に対する否定と、一方、ブルターニュの人々の生活実感の持続という、歴史的な両者の長い静かな対立関係を経ながらの成熟した併存関係とあってよい。

### トロメニの参加者たち —柔軟かつ強靱な参加形式—

トロメニの参加者たちとその役割分担について考えるとき、まず指摘できるのは、自由意志による奉仕的参加が主流であり、かつての特権的な役割分担は昔語りで語られることはあっても、現在ではそれはまったく機能していないということである。2001年と2002年のトロメニの三例における参加者たちを類別してみると、以下ようになる。第1は、神父たち聖職者である。教区の関係や聖職者同士の関係から参加者が集まってきている。第2は、地元の地域社会の会員たちである。世話人には、プレジドン、ファブリシアン、アソシアシオン、ファミリー、その他ボランティアなどいくつかの参加形式があり、それぞれ有効に機能している。ただし、とくに注目されるのはロクロナンのヒュッテの例である。いくつかのタイプで設営されているが、それらの中には特定のファミリーの代々の役割として継承されている例や特定の所有地に付属している例がみられる。つまり、ボランティア、ファミリーなど多様な社会関係がそれぞれ機能しているわけであり、柔軟なようでいて、きわめて強い伝承力を秘めた形式とあってよい。

現在、トロメニの道の草刈りやシャペルの掃除などの諸準備もその大部分がボランティアの方式での参加であるが、まったくの無形式というのではない。ロクロナンのように担当するファミリーがだいたい決まっている例もあれば、ランドロウのように *mairie* (地区) や *paroisse* (教区) から数人ずつ出る例、グエヌウのように世話人が中心となって手伝いの人たちと一緒にいる例もある。その他、実に多種多様な準備の作業があるわけであるが、それらについて、たとえば筆者たちが日本の民俗調査で試みるように、ひとつひとつの役割に対して、その役は誰の役と決まっているのか、と、組織的な面についていつものように質問してみるのに対して、一様に帰ってくるのは、

「それは決まっていない、意欲のある人の役目だ」、という答えである。<sup>(25)</sup>そして、草刈りなどの準備はもちろん、プロセシオンでの聖人の遺骨reliquesや十字架croixでさえ、たとえば筆者が担ぎたいのならその意志を表わせば筆者でも担げる、とまでいうのである。もちろん、筆者がこの伝統行事をある程度理解しているであろうことを前提にしてそのようにいうのである。トロメニは貴重な伝統であり、心配しなくても自然と誰かがそれぞれの役割を荷うのだというのである。croix et bannièresというのは、フランス語でひと仕事をしたという意味であるが、まさに奉仕とあやかりの心意をよく表わしている言葉である。ただし、一定の規範性が存在しないわけではない。それは、2001年のランドロウのトロメニで終始一貫、サン・テロの聖遺骨reliquesを担いだのは息子を無くした悲しい家族であったし、グエノウでサン・グエノウの聖遺骨reliquesを担ぐのは緊張に包まれる徴兵前の若者であったり、試験を前にした少年たちであった。そして、それらの役はかつては特権的な者たちのものであったと言いつたえられているのである。

参加者の第3のタイプは、他地域からの参加者である。それは近隣もしくは遠隔地からの信仰的な目的での参加者や観光や見物目的の参加者、それに取材と報道のための訪問者、また筆者たちのような学術調査のための訪問者も含まれる。彼らは、いずれも個人的な目的とその充足のために行動しており、伝統行事の伝達と継承という面からいけばまったくの第三者というべき存在である。しかし、彼らの存在もトロメニという伝統行事にとって必要なものであるにはちがいない。なぜなら、伝統とはそれを伝統と評価する第三者がいてはじめて伝統たりうるものだからである。

## おわりに — 伝承をめぐる力学 —

以上、主要な注目点や論点は、それぞれのトロメニの記述の中で指摘してきた。また、概括的には前節でトロメニの構成と特徴についてのべてきた。したがって、ここではそれを繰り返すことはしない。1999年から2002年にかけての足かけ4年間、それも現実的には約1ヶ月を単位とするそれぞれ短期間の滞在調査しか可能でなかったこのたびの筆者たちの日本の民俗学の試行的な、トロメニに対する事前調査・当日前後の調査・事後調査の結果は、大略以上のようなものである。もちろん、この4年間はトロメニについてだけ調査したわけではなく、その他、関連する民俗伝承には注意を払って情報収集をしてきたつもりである。また、いわゆる滞在型調査が有効であることはもちろんであるが、往来継続型調査の有効性も主張できる筆者たちの、その他の収穫情報等々については、さらに調査を進めて他日に期したいと思う。本論では、この初歩的なトロメニの調査の過程で注目された伝統行事の伝承現場の力学的な側面について若干ふれることによって、おわりに、とすることとしたい。

民俗学は伝承や伝統を分析する学問であり、世代間の伝達と継承の力学関係への注視はその重要なしごとの一部である。このたびのブルターニュ地方の伝統行事、トロメニの調査において注目されたのも、筆者がかつて日本の民俗伝承に関して指摘したことの<sup>(26)</sup>ある伝承をめぐる三つの作用力であった。それはA：維持継続の推進力、B：創造変更への揚力、C：休止廃止への引力、であり、基本的にはそれら三者の力学関係の中にトロメニという伝統行事も存在しているといつてよい。

たとえば、Aの作用力の体現者は、ランドロウではその厳粛にして聖なる職務を超えてしまうほ

どのヒューマニストPierre Mahe 神父であり、地域社会の彼の仲間たちである。グエヌウではもちろん退役軍人で教会の世話役であるRobert Roudaut夫妻であり、その仲間たちである。ロクロノンのトロメニでは、グラン・ファブリシアンはPierre Douilであるが、とても一人だけの象徴的な人物を挙げるができないくらい強力な伝統維持の推進力が集団的に働いていることは、すでにその現況記述で理解されたところであろう。一方、Bの作用力の体現を、目立つものと目立たぬものの両方で挙げておこなうならば、前者はグエヌウの第9スタシオンのペングエレックPenguérecの創出である。第2次大戦中の1944年にドイツ兵によってGouesnouの住民42名が虐殺された事件の追悼が新しいスタシオンを創出したのである。後者の例を挙げておこなうならば、ランドロウのPenity Saint-Laurentのペニティで行なわれるミサのための、トロメニ前日の祭壇の花の飾り付けで、Corbel, Toutec, Masson, Pichonの4人の女性たちが、前年の写真を参考にする理由について、「去年と少しでも違うようにするために見ているのよ。同じ材料を使ってもどこか変えるようにしているわ」と語ったその姿勢である。これらに対して、Cの作用力の体現例として最も強烈であったのは、ブルザネPlouzanéのトロメニである。1942年頃、このトロメニに参加したマドレーヌ・テロゾが詳細な記録を残しているのに対して、2001年に訪れた筆者たちが聞くことができたのはそれがすでに完全に廃れてしまってすでに30年以上も経っているという話であった。そして、1969年の最後のトロメニの写真と当時の順路がコピー資料でやっと入手できただけで、すでにブレストBrest近郊の新興住宅地となったブルザネPlouzanéにトロメニが再興される可能性はきわめて少ない。また、このような廃止とまではいかないものの、伝統行事トロメニにおける儀礼の省略化はいつでもどこでも起こっている。プロセシオンで人々の目を引く華麗ではあるが重量の大きいパニエールの行進は、ランドロウでもグエヌウでも、すでに途中の指定された場所までとなって省略されてきているし、前述のように聖遺骨reliquesを担ぐ特権的な地位も喪失され、それに代わって多様な意味づけがなされてきている。このような省略化は、croyances populaires民俗信仰のレベルでももちろんみられる。巨石の周りを三回まわるといふ信仰的所作は最近では見かけられなくなってきているし、泉水の奇跡の信仰も水質汚濁によって失われてきている。

このようなA, B, C, 三つの作用力の組み合わせにより、トロメニという伝統行事が伝承されてきているわけであるが、この伝統行事もつねに伝統的意味と現在の意味の両者をあわせもちながら営まれている実態が重要であろう。伝統的として注目されるのは、やはり長い伝承の過程を経ながらも変わりにくい側面である。儀礼的にはやはり、それは第1にトロメニの順路が領域の囲いを意味するという点、第2に聖人つまりその聖遺骨reliquesの巡行であるという点である。まさに、それは伝説の再現であり、聖人伝説の追体験である。聖跡としての櫛の木、石の椅子、牛の角の落ちた場所、などが再話されつづけ、語る者と聞く者との間で歴史の硬い時間が民俗の柔らかい時間へと移行し過去が現在へとよみがえる。そして、そのような時空の相対化される祭礼世界において、巨木、巨石、泉水に対する伝統的なcroyances populaires民俗信仰の世界が活性化し、人々の心身の奥部に宿る内在的な信仰衝動を刺激するのである。一方、現在の意味として注目されるのは、意味づけの柔軟な変奏である。この伝統行事の維持継承が絶大な人間力に支えられていることはすでにみたとおりであるが、参加者たちは、地域社会内部でも世話役と協力者、地域社会で維持する人々と外部社会から参加する人々、等々、無限の“内と外”という2種類の関係性が入れ子細工のように

連なった人間関係の中にある。そして、そのそれぞれの立場で各自が内面化した多様な意味づけを保持し育成しているのである。その意味づけは傾向性の上で宗教的意味づけと世俗的意味づけとに大別される。前者では、純粹で敬虔な信仰行為として参加奉仕している人々もいれば、肉体的治癒や精神的治癒を求める信仰的動機をもって参加している人々もいる。後者では、惰性化する日常に対して精神と肉体のリフレッシュ、再活性化のための適度の運動、エクササイズとして参加している人々もいる。そうしてトロメニは伝統という追い風を背負った壮大な集団の実践であると同時に、参加者の数だけ意味をもつ強烈で自由な個人的実践に他ならないのである。

### 註

- (1) — 「人と鳥のフォークロア—民俗世界の時間と構造—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第15集 共同研究「儀礼・芸能と民俗の世界観」』1987
- (2) — 『ケガレからカミへ』木耳社1987・新装版 岩田書院1997
- (3) — 『長門市史 民俗編』長門市史編集委員会 長門市 1979 P.241~245
- (4) — 村井紀「南島イデオロギーの発生—柳田國男と植民地主義」福武書店1992, 子安宣邦「一国民俗学の成立」『岩波講座 現代思想1 思想としての20世紀』岩波書店1993, 川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』講談社1996
- (5) — 新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」『人類にとって戦いとは 5 イデオロギーの文化装置』東洋書林 2002
- (6) — 岩本通弥「国際連盟委任統治委員としての柳田」『文明研究』13号 東海大学文明学会 1994, 藤井隆至「柳田國男のアジア意識」『柳田國男 経世済民の学』名古屋大学出版会1995 (初出『アジア経済』アジア経済研究所1975), 福井直秀「柳田國男のアジア認識」『近代日本のアジア認識』緑蔭書房 1996 (初出 京大人文研1994), 後藤総一郎「柳田國男の「植民地主義論」の誤謬を排す」『常民大学研究紀要』2号 岩田書院 2001
- (7) — Donatien Laurent 'La Troménie de Locronan ; Actualite d'un pèlerinage millénaire' "Ar Men" 9,1987
- (8) — Chanoine Louis Kerbiriou "Lanleau dans la Cornouaille des Monts" Imprimerie de la presse libérale—Brest, 1942
- (9) — 注(8)と同じ
- (10) — 注(8)に引用されている Madeleine Desroseaux "Est-ce la dernière troménie ?" "Bulletin diosésain d'archéologie" より。
- (11) — Albert Le Grand "Vie des saint de la Bretagne l'harmonique" 1636
- (12) — Bernard Tanguy "La troménie de Gouesnou" dans "Annales de Bretagne et des Pays de l'Ouest", t.91-1984-numéro 1
- (13) — 注(12)と同じ
- (14) — 注(12)と同じ
- (15) — Donatien Laurent 'La troménie de Locronan; Rites, espace et temps sacré' "Saint Ronan et la troménie" Actes du colloque international, 1989, pp.11-57
- (16) — 注(15)と同じ
- (17) — 注(7)と同じ
- (18) — Christiane Vilain 'Locronan et sa troménie ; L'affirmation d'une identité' "Ar Men" 28, 1990, pp.2-15
- (19) — 注(7)と同じ
- (20) — 注(7)と同じ
- (21) — 語源学étymologieではterritoireは土地を意味するラテン語territoriumに由来するものとされており、それは揺らぐことはないであろうが、一つの可能性として、terri(土地)toirs(一巡)を考えることはできないであろうか、との着想が浮かんでくるのである。
- (22) — 原初回帰とシステム変換については、新谷尚紀「遊びの深層—儀礼と芸能の間—」『ケガレからカミへ』木耳社1987 (新装版 岩田書院1997) 参照のこと。なお、A. V. ジェネップ以来の民族学の儀礼研究には、大別して二つの系統がみられる。一つは、儀礼とはふだんはかくれている文化の深層を、そして共同体のあり方を、映し出す鏡であり、それによって価値観の再確認などが行なわれる、というもので、たとえばエドモンド・リーチ「時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ」『人類学再考』思索社1974(原著1961)などにそれはうかがえる。もう一つは、儀礼とは共同体の構成員がある集団から他の集団へと移るときなどに古いシステムへの適応の方式か

ら新しいシステムへの適応の方式を新たに獲得するものである、というもので、たとえばヴィクター・ターナー『儀礼の過程』思索社1976（原著1969）などの中にもそうした傾向がうかがえる。

(23) — 注(15)に同じ

(24) — 「ヤドリギについて述べる時、ガリアの諸属州においてこの植物に対して示される尊敬を省略するわけにもいかない。ドルイド—これは彼らが彼らの魔術師を呼ぶ名である—はヤドリギとそれが宿っている木よりも神聖なものはないと考えている。ただそれはカシに限るのだが。カシの森はそれ自体として選ばれる。そして、魔術師はそういう森を用いずに儀式を行なうことはない。それで彼らが「カシ」を意味するギリシア語からきたドルイドという名前を得るのは、この習慣からであると想像されるであろう。さらに、カシの木に宿っているもの

はすべて天から送られたものであり、その特定の木は神自身によって選ばれたしるしであると、彼らは考えている。(中略)彼らは飲み物に入れて与えられたヤドリギはどんな不妊の動物にも生殖力を与え、そしてそれはすべての毒に対する解毒剤だと信じている。」(中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』雄山閣出版1986)

(25) — 関沢まゆみ「バルドン祭りにみる巡礼と旅」『旅の文化研究所研究報告』10号 2001(同『隠居と定年—老いの民俗学的考察—』臨川書店 2003収録)では、バルドン祭りの場合にも自由意志による奉仕の参加が主流でありながらそれが逆に柔軟かつ強靱な参加形式となることがすでに指摘されている。

(26) — 新谷尚紀「叩く—嫁叩き・消滅する民俗—」『山梨県史研究』9号 2001

#### (付記)

本論文は、文部科学省科学研究費助成による基盤研究(B)(海外)「民俗信仰と創唱宗教の習合に関する比較民俗学的研究」(研究代表者：新谷尚紀)(2000~2002年)の調査研究成果の一部である。民俗調査というのは実に多くの方々のご協力があったこそその作業であり、それなしでは拙論の1頁さえ執筆できなかったであろう。第一には同じ科研の共同研究者である関沢まゆみ氏の多大な協力であり、比嘉政夫氏と宮本袈裟雄氏からも貴重な情報提供をいただいた。また、1998年度国立歴史民俗博物館COE国際シンポジウム「生・老・死—日本人の人生観：内からの眼、外からの眼」に参加いただいたフランス国立高等研究院のHartmut O. Rotermond教授、Jean-Noël Robert教授、ボルドー大学のAlain Rocher教授には、その後も長くご指導いただいているが、今回の海外研究では研究協力者のプレスト大学のDonatien Laurent教授、Alain Tanguy研究員からとくに多くの御教示とお世話をいただいた。現地調査に当っては、長い友人のCécile Senaux, Isabelle Noesmoen, 松上朋子の三氏、それにLandeleauのPierre Mahe神父、GouesnouのRobert Roudaut夫妻、Locronanの調査におけるGeorges Bernard夫妻をはじめ、多くの方々のご協力を得た。また、難解な文献の解説で御協力御教示いただいたのは滝川広子氏である。ここに記して謝意を表しておきたい。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

(2003年3月4日受理, 2003年5月9日審査終了)

---

## **The Tromenie of Brittany : Tradition and the Present-day**

SHINTANI, Takanori

The Tromenie is a tradition linked to beliefs surrounding saints in Brittany. Annually, or once every six years, a procession carrying crosses and banners is formed to carry the relics of a saint, who came from Ireland and Wales, and follow the route taken by the saint when he was told by a feudal lord that he would grant the saint the land that he was able to cover in one day's walking. The word tromenie is believed to derive from either tro minihi or tro mene in the Breton language, meaning a circuit (tro) of the minihi (area surrounding a monastery) or mene (mountains), and because the words tro (circuit) and tour (tour) lead to the establishment of territoire (territory), an etymological closeness between the words tromenie and territoire has emerged. The ritualistic repetition of experiencing for oneself the path of the saint is a reenactment of the establishment of territory and the "return to origins" attributable to this ritual serves a function where the shift from a rigid historical time to a time of flexible folk custom provides an impetus for the beliefs of the participants. In particular, the traditional folk beliefs of the Bretons in sacred trees, sacred stones, and sacred springs, which are not part of the Catholic doctrine, are visible in the stations set up along the route and the ritualistic performances of the participants. The relationship between the two is not one of assimilation or amalgamation, but is rather a relationship of tacit approval and coexistence. What is characteristic about the participants and their roles is that while in the main the president, fabrician, association, famille, and other volunteers participate by providing an array of services of their own free will, conversely, it is precisely this that results in a flexible yet robust form of participation. There are two different relationships at play in that there are the two relationships of mutual finitude and perpetuity of participants existing on top of the mutual relationships between the three forces that affect traditional events: the impetus to maintain and continue, the power to usher in creative changes, and the pull to suspend or abolish. These combine with each other to form a collective observance, but at the same time it is precisely its form of individual observance, for which the number of individual participants alone has significance, wherein the fundamental force to preserve the tradition lies.